

〈資 料〉

食べ物の名数

(3) 穀物の名数

A Denominate Number for Food

(3) A Denominate Number for Cereals Shown in Classical Literature

森田 潤 司
(Junji MORITA)

はじめに

古来、穀物*1が実らないことは国家の重大事であった。したがって、中国の古典『礼記』¹⁾²⁾(紀元前275年~221年頃)月令が記するように、君主の役割は不作とならないように季節ごとに五穀豊穰を祈り、害の無いように対応し、穀が実れば天や祖霊に感謝することであった。^(注1)3)4)

五穀について『墨子』⁵⁾(戦国時代 紀元前450年~390年頃)七患第五は次のように述べている。

そもそも五穀は人民が天から授かるものであり、君主が我が身を養いまた人民を養うものである。だから人民が五穀を天から授からないときは、君主は我が身を養い人民を養うことができない。また人民に食べ物が無ければ、人民を使うことはできない。だから食物を得ることに務めなければならず、土地を開拓することに力めなければならず、費用は節約しなければならぬ。

五穀がすべて豊作であれば、五味はすべて君主の口に御めるが、五穀のすべてが豊作でなければ、五味のすべては君主の口に御めない。五穀のうち、一穀が不作であるのを饑と謂う。二穀がともに不作であるのを罕と謂う。三穀がともに不作であるのを凶と謂う。四穀がともに不作であるのを餓と謂う。五穀がともに不作であるのを饑と謂う。その歳の作柄が饑であれば、即ち仕官した者で大夫の官以下は皆そ

の俸禄の五分の一を減らす。罕であれば、即ち五分の二を減らす。凶であれば、即ち五分の三を減らす。饑であれば、即ち五分の四を減らす。饑であれば、即ち盡く禄を無して当座の食糧(稟食)を受けただけである^{5b)}(注2)。

ここでは五穀は重要な穀物の総称である。また、不作を饑、罕、凶、饑、饑と五段階に分けている³⁾。『穀梁伝』⁶⁾(漢 紀元前206年-209年)襄公二十四年も、『墨子』とは呼び方が異なるが、不作を饑、饑、饑、康、大侵の五段階に分けている³⁾⁴⁾⁷⁾⁸⁾(注3)。『韓詩外傳』⁹⁾(漢代)は不作を饑、飢、饑、荒、大侵の五段階とする^(注4)。

古来、重要な穀物のうち、特に五種類の穀物を五穀と云うほか、二穀、三穀、六穀、八穀、九穀などという名数でまとめて挙げることもある⁷⁾⁸⁾¹⁰⁾⁻²⁵⁾。

たとえば、『初學記』¹⁰⁾(唐728年)卷二十七 寶器部五穀第十〔敘事〕は中国古典に見られる穀物の名数をまとめており、九穀、六穀、五穀、五種、四種、三種、百穀を記している。『格物総論』⁷⁾(南宋1257年)穀は三穀、五穀、六穀、九穀、百穀を挙げる。名数書『小學紺珠』⁸⁾(南宋1296年以前)動植類には九穀、八穀、六穀・六菜・六食、五穀・五種、四種、三種、六米、百穀、四穀の項があり、各々その種類を挙げて¹⁷⁾。『羣書拾唾』¹¹⁾(明代14世紀末)は、五穀、六穀、九穀を挙げて¹⁷⁾いる。

日本の書では、たとえば『和漢名数』¹³⁾(元禄5年-1692)動植第九には、五穀と八穀の項があり、『和爾雅』²⁶⁾(元禄7年-1694)米穀部には五穀、六穀、八穀、九穀の項がある。近世節用集の代表格である『書言字考

節用集¹⁴⁾(享保2年-1717)巻第十 数量門にも五穀、六穀、八穀、九穀の項がある。『經典穀名考¹⁶⁾(文政11年-1828)には百穀、五穀、六穀、八穀、九穀の項があり、あわせて、植物名についての證據と正誤を詳しく述べている。また、新しいところでは『廣文庫¹⁷⁾の「ごこく」の項や『羣書索引¹⁸⁾の「こく」及び「ごこく」の項が、三穀、四穀、五穀、六穀、八穀、九穀、十七穀、百穀を出典とともに紹介している。『大漢和辞典¹⁹⁾には、二穀、三穀、三種、四穀、五穀、五種、五稼、五梁禾、六穀、六齋・六米、六陳、八穀、九穀、百穀などの項がある。しかしながら、書物により各名数の内容が決まっていないことは前稿²⁷⁾28)でまとめた五穀の場合と同様である。本稿では穀物に関わる五穀以外の名数とその内容についてまとめた。

二穀 にこく

二種類の穀物。黍(モチキビ)^{*2}・稷(ウルチキビ)^{*3}。二穀の語は『墨子⁵⁾七患に〈二穀不_レ収謂_二之罕_一〉(三穀が成らないことを罕と謂う)とあり^(註2)、『穀梁伝⁶⁾(漢紀元前206年-209年)襄公二十四年^(註3)や『韓詩外傳⁹⁾(漢代)に、〈二穀不_レ升謂_二之饑_一〉(二穀が成らないことを饑(飢)と謂う)とある¹⁹⁾(註4)。いずれの書も穀の内容は挙げていないが、『九穀考²⁹⁾(清代)には巻五百五十一に〈弁論黍稷二穀記〉とあり、二穀に黍と稷を挙げる。

三穀 さんごく

三種の穀物。梁(ウルチオオアワ)^{*4}・稻(モチイネ)^{*5}・菽(マメ)^{*6}。三穀の語は、『墨子⁵⁾七患に〈三穀不_レ収謂_二之凶_一〉(三穀が成らないことを凶と謂う)とあり^(註2)、『穀梁伝⁶⁾襄公二十四年や『韓詩外傳⁹⁾に〈三穀不_レ升謂_二之饑_一〉(三穀が成らないことを饑と謂う)^(註3)(註4)の語がある¹⁹⁾。『格物総論⁷⁾(南宋1257年)穀は三穀として梁・稻・菽を挙げる^(註5)。日本では『本朝食鑑³⁰⁾(元禄8年-1695)^(註6)及び『和漢三才図会³¹⁾(正徳2年-1712頃)^(註7)は、五穀、九穀とともに三穀を記し、同じく梁・稻・菽を挙げる。

三種 さんしゆ

古代中国東北幽州の代表的三種の穀物。黍(モチキビ)¹⁾・稷(ウルチキビ)²⁾・稻(モチイネ)。鄭玄(後漢末127年-200年)は、『周礼³²⁾夏官職方氏で東北幽州に適する三種の穀物に注して、黍・稷・稻を挙げる¹⁰⁾(註8)。これを受けて『初學記¹⁰⁾は〈幽州其穀宜三種黍・稷・稻〉と記す。『小學紺珠⁸⁾五穀五種の項が〈幽州三種無_レ菽麥_一〉と記

すように^(註9)、三種は黍・稷・菽・麥^{*7}・稻の「五種」から菽と麥を除いた三品種の穀物である。「五種」については後述する。

四穀 しこく

四種の穀物。特に四種のキビ。①¹⁾秬(モチクロキビ)^{*8}・秠(オオクロキビ)^{*9}・麩(モチアカキビ)^{*10}・²⁾苽(モチシロキビ)^{*11}。古代中国でキビは主要な穀物であった。あるいは②黍・稷・稻・梁の四種。

四穀の語は、『墨子⁵⁾七患に〈四穀不_レ収謂_二之饑_一〉(四穀が成らないことを饑と謂う)とあり^(註2)、『穀梁伝⁶⁾襄公二十四年に〈四穀不_レ升謂_二之康_一〉(四穀が成らないことを康と謂う)^(註3)とある。『韓詩外傳⁹⁾巻第八にも〈四穀不_レ升謂_二之荒_一〉とある^(註4)。また、『詩経²⁾33)34)35)大雅 生民之什に〈誕降_二嘉種_一 維秬維秠維糜維苽〉の語があり、続けて鄭玄の〔箋〕に〈后稷以_二天為_レ己下_二此四穀_一之故則徧種_レ之〉(注:訓点は大漢和辞典¹⁹⁾)とある。これを受けて『小學紺珠⁸⁾動植類は四穀に①の秬・秠・麩・苽^{*11}を挙げる¹⁷⁾¹⁹⁾(註10)。

別に『九穀考²⁹⁾巻五百五十一には〈圖黍稷稻粱四穀記〉の条があり、四穀の語句がある。これによると、四穀は②の黍・稷・稻・梁である。

日本では江戸時代の『分類節用集³⁶⁾(延宝8年-1680)に〈四穀 麻麥稻_〇稷粟_〇菽豆_〇造釀〉と四穀の項があるが^(註11)、語注記の穀物名の区切りは不詳。

四種 ししゆ

古代中国河東兗州の四種の代表的穀物。黍(モチキビ)¹⁾・稷(ウルチキビ)²⁾・稻(モチイネ)³⁾・麥(ムギ)。

『周礼³²⁾夏官職方氏の河東曰兗州に適する四種に鄭玄は注して、黍・稷・稻・麥を挙げる¹⁹⁾(註8)。これを受けて、『初學記¹⁰⁾に〈袁州其穀宜四種黍・稷・麥・稻〉とあり。この四種の穀は『小學紺珠⁸⁾動植類五穀・五種の項に〈四種袁州無_レ菽〉とあるように、五種(黍・稷・菽・麥・稻)から菽を除いた穀物である^(註9)。

四麥 しばく・よんばく

農林省の農林水産省統計で扱った麦の代表的四種。小麦(コムギ)・六条大麦(カワムギ)・裸麥・二条大麦(ビールムギ)。小麦・六条大麦・裸麥を三麦ということもある。

五稼 ごか

五稼の語は『春秋左氏傳³⁷⁾(春秋時代紀元前5世紀頃)僖公、三年の〈不_レ曰_二旱不_レ為_レ災也〉への(唐)孔穎達

の〔疏〕に〈周六月。夏四月、於播五稼無損也〉とある¹⁹⁾。稼は『説文』³⁸⁾第七篇上 禾部に〈稼、禾之秀實爲稼、莖節爲禾稼¹⁹⁾39)とあるように実のついた稲の穂でのこと¹⁹⁾で収穫をいう³⁹⁾が、五稼の内容を説明した文献は見当たらない。

五穀 ごこく

五穀の語は、『墨子』⁵⁾七患に〈五穀不収謂之饑〉(五穀が成らないことを饑と謂う)とあり^(注2)、『穀梁傳』⁶⁾襄公二十四年や『韓詩外傳』⁹⁾に〈五穀不升謂之大侵〉(五穀が成らないことを大侵と謂う)とある¹⁹⁾(注3)(注4)など、多くの書に出てくる。五穀の内容は前稿で述べた²⁷⁾28)。

五種 ごしゆ

五種の語は、『周礼』³²⁾夏官 司馬下 職方氏などがあり、古代中国の河南曰豫州及び正北并州の代表的穀物をいう。鄭玄の注^(注19)によると黍・稷・菽・麥・稻。五種については前稿でも述べた²⁷⁾。

五梁禾 ごりょうか

さまざまな穀物。『漢書』⁴⁰⁾郊祀志に句がある¹⁹⁾(注12)。五色禾。

六穀 りくこく・りっこく・ろくこく・ろっこく

重要な六種の穀物。六齋¹⁹⁾。六粢。①禾*¹²⁾・黍・稻・麻・菽・麥あるいは②稌*¹³⁾(稲)・黍・稷・梁・麥・苽(マコモ)*¹⁴⁾。

『呂氏春秋』⁴¹⁾(紀元前239年)の卷末、土容論審時篇に並ぶ主要作物は、①の六穀である⁴²⁾。『周礼』³²⁾天官膳夫に「天官 膳夫は王の食飲膳羞を掌り、饋食に六穀を用いる」とあり、鄭玄は、六穀に注して、②の六穀を挙げる¹⁹⁾43)(注13)。『周礼』³²⁾春官小宗伯の六齋における鄭玄の注釈に「齋は粢と読み、六粢はいわゆる六穀黍稷稻粱麥苽である」とあり、鄭玄はここでは六穀に注して黍・稷・稻・梁・麥・苽を挙げる⁴³⁾(注14)。稌と稲は同物異名であるので、天官膳夫の鄭玄注及び春官小宗伯の鄭玄注は相同じと考えてよい⁴³⁾。

その後、『初學記』¹⁰⁾(唐728年)^(注15)、『鶴林玉露』⁴⁴⁾(宋1248年)^(注16)、『事文類聚 後集』⁴⁵⁾(南宋1246年)¹⁸⁾(注17)、『小學紺珠』⁸⁾(南宋1296年以前)^(注18)、『羣書拾唾』¹¹⁾(明代14世紀末)^(注19)、『五雜俎』⁴⁶⁾(明1619年)^(注20)、『太平御覽』⁴⁾(宋代初期977年～983年)^(注21)、『談薈』¹⁷⁾18)などが鄭玄に従い、六穀に稌(稲)・黍・稷・梁・麥・苽を挙げる。『古今類書纂要』⁴⁷⁾(明代)は六穀に黍・

稷・稻・梁・麥・豆¹⁸⁾(注22)。

日本では『和爾雅』²⁶⁾卷之六米穀部第十八は、周礼に見えるとして禾・麥・黍・稻・粟・菽と②の稌・黍・稷・梁・麥・苽の二説を挙げる^(注23)(注：前説の粟は麻の誤りとすると①の六品種となる)。

『節用集大全』⁴⁸⁾(～元禄4年-1691)には「六穀 リクコク 黍、稷、稻、梁、苽、麥」^(注24)とあり、『書言字考 節用集』¹⁴⁾(享保2年-1717)は、『羣書拾唾』¹¹⁾を引いて「六穀 ロクコク 稻、黍、稷、梁、麥、苽」を挙げる(注：苽は苽の誤り)⁴⁹⁾(注25)。山田文靜〔著〕『教典穀名考』¹⁶⁾(文政11年-1828)にも〈六穀。黍、稷、稻、梁、麥、苽とある^(注26)。『和漢三才図会』^{31a)}に六穀の語があり¹⁸⁾(注7)、『羣書索引』¹⁸⁾によると、『分類故事要語』(正徳4年-1714)卷九にも六穀の項がある¹⁸⁾。

六食 りくし

六食は六穀の飯である。六食の語は『周礼』³²⁾天官食醫に「食医は王の六食、六飲、六膳、百羞、八珍之齊を掌和する」とある⁸⁾19)(注27)。また、『周礼』³²⁾地官饌人にも〈饌人掌凡祭祀共盛 共王及后之六食〉とあり⁸⁾、鄭玄は「六食は六穀の飯なり」と注する^(注28)。また、『小學紺珠』⁸⁾もこの鄭玄注を引く^(注18)。

六齋・六粢 りくし・ろくし

古代中国で重要な六種の穀物¹⁹⁾。稲・黍・稷・梁・麥・苽。

「粢」とは穀物の総称。特にキビを指し、神に供える穀物のこと¹⁹⁾。齋は粢と同じで、六齋及び六粢は六穀に同じである。

鄭玄は『周礼』³²⁾春官小宗伯 六齋に注して「齋は粢と読み、六粢はいわゆる六穀黍稷稻粱麥苽である」と、黍・稷・稻・梁・麥・苽を挙げる⁴³⁾(注29)。これを受けて『小學紺珠』⁸⁾六粢 六齋は黍・稷・稻・梁・麥・苽を挙げる^(注18)。

鄭玄は一方で、『周礼』³²⁾天官膳夫の〈凡王之饋食用六穀〉の六穀に注して稌・黍・稷・梁・麥・苽を挙げる^(注13)。稌と稲は同物異名であるので¹⁹⁾39)50)、天官膳夫の鄭玄注及び春官小宗伯の鄭玄注は相同じと考えてよい⁴³⁾。

六米 りくべい・ろくべい

九穀のうち旧来「米」の字を当てていた、実をもつ六種の穀類。黍・稷・稻・梁・苽・大豆。「米」は現在日本では稲の実の意味で使われることが多いが、本来は

「禾の穂に穀実がついている形」³⁹⁾⁵⁰⁾で「初穀から取り出された穀實」¹⁹⁾のことである。『周礼』³²⁾地官司徒下 舍人〈掌米粟之出入辨其物〉の鄭玄の注に〈九穀六米〉の語があり、賈公彦の疏に「六米は九穀のうちの黍・稷・稻・粱・苽・大豆」とあり、続けてその理由を〈六者皆有米 麻與小豆小麦、三者無米、故云九穀六米〉と挙げる¹⁹⁾(注14)。つまり『周礼』³²⁾天官大宰の鄭玄注の九穀は黍・稷・稻・粱・麻・麦・大豆・小豆・苽であるが、このうち六つは米があり、麻と小豆、小麦の三つは米がないというわけである。『小學紺珠』⁸⁾動植類六米もこれを引く¹⁹⁾(注30)。

六陳 りくちん

並べて貯蔵の効く六種の穀物。『大漢和辞典』¹⁹⁾によると、米・大麦・小麦・大豆・小豆・胡麻。

七種 ななしゆ

七種という名数で穀物をまとめることはないようだが、米コメ・粟アワ・黍子キビ・稗子ヒエ*¹⁵⁾・萱子ミノゴメ(ムツオレグサ・タムギ)*¹⁶⁾・胡麻ゴマ・小豆アズキなど七種の穀物を入れた七種粥が知られている⁵¹⁾⁵²⁾。

八穀 はっこく はちこく

古代中国の主要な八種類の穀物。①黍・稷・稻・粱・禾・麻・菽・麦、②稻・黍・大麦・小麦・大豆・小豆・粟*¹⁷⁾・麻。あるいは③黍・稷・稻・粱・麻・菽・麦・烏麻(クロゴマ)*¹⁸⁾。いずれも五穀に三種類を加えたもの。

『小學紺珠』⁸⁾動植類 八穀は本草注として、①の八品種を挙げる¹⁷⁾¹⁹⁾(注31)。『本草綱目』⁵³⁾(明1578年)も穀部 稷及び赤小豆に詩に謂うとして、黍・稷・稻・粱・禾・麻・菽・麦を挙げる^{(注7)(注32)}。「本草注」や「詩謂」は、南梁の陶弘景が本草に注して初めて「詩に曰く黍・稷・稻・粱・禾・麻・菽・麦、此八穀也。」と八穀を挙げたことを指す¹⁶⁾(注33)。『小學紺珠』⁸⁾動植類 八穀は別に大象賦注として②の稻・黍・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・麻を挙げる¹⁷⁾¹⁹⁾(注31)。ここでは①の稷と禾に変えて粟が入り、菽と麦をそれぞれ二種に分けている。

『五雜俎』⁴⁶⁾は〈『甘石星經』にはさらに、八穀は八星に応じるといっている。八穀とは、黍・稷・稻・粱・麻・菽・麦・烏麻である。その星は河車の北にあり、明るくなると、丹になる。〉^{46b)}(注34)と、八穀に③の五種を挙げる。河車とは道家で北方の正気でその北に八穀を掌る八穀星という名の星があり、八穀は八穀星が明るくなると

熟すというのである。八穀の語は『星經』の他、『晋書』⁵⁴⁾天文志上²⁹⁾、『九穀考』²⁹⁾などにある^(注35)。ちなみに、『開元占經』⁵⁵⁾をみると〈甘氏曰〉の内容が少し異なり、稻・黍・稷・大麦・小麦・大豆・小豆・麻と②の八穀である^(注36)。『談薈』¹⁷⁾¹⁸⁾も同じく②の八穀である。『宋史』⁵⁶⁾志 天文二紫微垣も〈武密曰〉として②の八穀を挙げる^(注37)。

日本では、『和爾雅』²⁶⁾が星經に見ゆとして、③の八種を挙げる^(注23)。『大和本草』¹⁵⁾(宝永6年-1709)巻之二 論用薬は数目類に五穀、八穀、九穀を挙げ、八穀には『小學紺珠』を引用して②と順は異なるが、稻・黍・大豆・小豆・大麦・小麦・粟・麻を挙げる¹⁷⁾(注38)。『和漢名数』¹³⁾動植第九や『続 和漢名数』⁵⁷⁾(元禄8年-1695)下にも同じ記述がある。『節用集大全』⁴⁸⁾や『書言字考節用集』¹⁴⁾⁴⁹⁾巻第十 数量門も「八穀 ハッコク 黍、稷、稻、粱、禾、麻、菽、麦」^(注39)。『和漢三才図会』^{31a)}にも八穀の語があり¹⁸⁾(注7)。『經典穀名考』¹⁶⁾に詳しい^(注33)。『羣書索引』¹⁸⁾によると『典籍便覧』四巻三及び『分類故事要語』(1714年)にも八穀の項がある。

九穀 きゅうこく

九種類の穀物。九穀は『周礼』³²⁾天官大宰の九職に〈三農生九穀〉(一に三農という。九穀を生う)の句があり、『周礼』³²⁾夏官職方氏にも〈職方氏掌天下之圖辨其邦國都鄙(中略)九穀六畜之數〉の句がある^(注8)。これを受けて『初學記』¹⁰⁾は〈職方氏掌天下之圖辨其邦國都鄙九穀之數〉と記す。九穀の内容には以下諸説ある。『九穀考』²⁹⁾(清代)は九穀についてさまざまな角度から記しているが、九穀の内容については苽の条で後述する范勝之(前漢末紀元前1世紀頃の人)の書、鄭衆(鄭司農。70年頃後漢の人)の説、段成式『酉陽雜俎』の説、元司農司『農桑輯要』の説及び鄭康成(鄭玄)(後漢末127年-200年)の説を挙げる。『羣書索引』¹⁸⁾によると『分類故事要語』巻九や『嬉遊漫筆』下にも九穀の項がある。

①黍・稷・秫*¹⁹⁾・稻・麻・大豆・小豆・大麦・小麦。

『齊民要術』⁵⁸⁾(北魏532年~549年頃)巻一 種穀第三に引用される、范勝之(紀元前1世紀頃前漢末の人)の説では、九穀は稻、黍、黍、麻、秫、大麦、小麦、大豆、小豆である^(注40)。『事林廣記』⁵⁹⁾(注41)(元代1340年)も范勝之の説を引いて九穀に同じく小豆、大麦、稻、麻、秫、大豆、小麦、黍を挙げる。それ以前に鄭衆も范勝之の説を受けて〈三農生九穀〉の九穀に注して黍・稷・秫・稻・麻・大豆・小豆・大麦・小麦を挙げる。この鄭衆の説は、鄭玄(康成)が『周礼』³²⁾天官大宰〈三農生

食べ物の名数

九穀)の注で紹介している⁴³⁾(^{注42)}。鄭衆の挙げる九穀は五穀の「麻・黍・稷・麦・豆」に「秫・稻・小麦・小豆」の四種を加えた九種である。

その後、『太平御覧』⁴⁾百穀部一 穀(^{注21)}、『事文類聚』⁴⁵⁾(南宋1246年)穀菜部(^{注17)}、『小学紺珠』⁸⁾動植類九穀(^{注43)}、『九穀考』²⁹⁾などが多くの書が「大宰九穀、鄭司農注」としてこの九種を挙げる²²⁾²³⁾。『談薈』も同じ¹⁷⁾¹⁸⁾。

日本では『和漢名数』¹³⁾、『大和本草』¹⁵⁾(^{注38)}、『和爾雅』²⁶⁾(^{注23)}、『本朝食鑑』³⁰⁾(^{注6)}、『和漢三才図会』³¹⁾(^{注7)}、『書言字考節用集』¹⁴⁾(^{注44)}などが鄭衆(鄭司農)の説を紹介している。『和爾雅』²⁶⁾は他に後述③の炙穀子の説、④の『酉陽雜俎』⁶⁰⁾の説を挙げる(^{注23)}。

②黍・稷・稻・粱・麻・麦・大豆・小豆・苽。

鄭玄は『周礼』³²⁾天官大宰「三農生九穀」で鄭衆(鄭司農)の説に従わず、九穀をこの九種に改めている(^{注42)43)}。鄭玄の注では①の九穀とは異なり、秫がなく大麦小麦をまとめて麦とし、新たに粱と苽(マコモ)を加えている。清代の程瑤田は『九穀考』²⁹⁾苽の項で范勝之の書、鄭司農(鄭衆)の説、段成式『酉陽雜俎』⁶⁰⁾及び元司農司『農桑輯要』⁶¹⁾には、どれも苽(マコモ)がないが、鄭康成(鄭玄)が九穀の一つに苽(マコモ)を入れたのは食医の六宜(^{注45)}を考え合わせたものであると鄭玄の見識に感服している⁶²⁾。『談薈』も鄭玄の説を紹介している¹⁷⁾¹⁸⁾。

③黍・稷・麻・麦・稻・粱・苽・大小豆。

『五雜俎』⁴⁶⁾物部三が炙穀子(唐代元和期の詩人王叡)が云うとして、この九種を挙げる(^{注46)}。

④黍・稷・稻・粱・三豆・二麦。

『五雜俎』⁴⁶⁾は「『酉陽雜俎』には「九穀とは、黍・稷・稻・粱・三豆・二麦である」とある。」と紹介している³¹⁾⁴³⁾(^{注46)}。ここでは麦を大小に分け、豆を三種としている⁴³⁾『古今注』⁶³⁾(^{注47)}(西晋代3世紀頃成立)にもあり、『小学紺珠』⁸⁾動植類九穀に「古今注」(^{注43)}として引用されている¹⁷⁾。

⑤黍・稷・稻・粱・麻・麥・秫・苽・豆。

『羣書拾唾』¹¹⁾が挙げる¹⁸⁾(^{注19)}。秫と苽が入る。

⑥稷・麻・黍・稻・麻・大小豆・大小麥。

『古今類書纂要』⁴⁷⁾(明1669年)が挙げる¹⁸⁾(^{注22)}。

⑦黍・稷・稗・稻・麻・大麥・小麦・大豆・小豆『農桑輯要』⁶¹⁾(元1273年)が挙げる⁴³⁾(^{注48)}。稗(ヒエ)を加えている点が珍しい⁴³⁾。

⑧稷・稻・黍・米・菽・麻・大豆・小豆・大麥。

『拾芥抄』⁶⁴⁾(13~14世紀)下・飲食部が挙げ

る⁴⁹⁾(^{注49)}。

⑨黍・稷・稻・粱・麦・苽・大小菽・小麦。山田文靜『經典穀名考』¹⁶⁾が鄭衆(鄭司農)の説と鄭玄の説を考察して挙げる。

十穀 じっこく・じゅっこく

(1)五穀と塩。塩は五穀に匹敵する貴重な食べ物であることから、五穀と塩とを合わせて十穀という²⁵⁾。仏教においては修験者の行に五穀あるいは十穀を食べない穀断ちがある。穀断ちの別称を木食戒、断穀行、また、五穀、十穀の名をとって「五穀断ち」「十穀断ち」という。(2)代表的穀物。内容には諸説あり、一定しない。米、米(玄米)、黒米、赤米、小麦、大麦、大麦(押し麦)、大麦(米粒麦)、はとむぎ、粟、稗、黍、大豆、黒豆、小豆、緑豆、トウモロコシ、蕎麦、黒胡麻、白胡麻、クコ、アマランサスなど穀物全般あるいは食物全般のことを指すこともある。

十七穀 じゅうしちこく

『四分律行事鈔資持記』⁶⁵⁾に「十七穀は、一に稻、二に赤稻、三に小麦、四に糠麦、五に小豆、六に大豆、七に胡豆、八に豌豆、九に粟、十に黍、十一に麻、十二に薑、十三に閻鼓、十四に婆羅陀、十五に莠鼓(稗子)、十六に脂那、十七に俱陀婆」とある(^{注50)}。それぞれが何を指すのか詳しくはわからない。

百穀 ひゃっこく

いろいろの穀物。古く穀物を総称して百穀といった¹⁹⁾⁶²⁾。周代の『周易(易経)』²⁾⁶⁶⁾⁶⁷⁾、『詩経(毛詩)』²⁾³³⁾⁶⁸⁾⁶⁹⁾、『尚書(書経)』²⁾⁷⁰⁾⁷¹⁾、『春秋(左子伝)』⁷²⁾などに「百穀」の語がある(^{注51)}。

穀物の総数が「百穀」となることについて、『物理論』⁷³⁾(300年頃)に「粱とは黍稷の類の総称。稻とは漑種の類の総称。菽とは豆類の総称。この三穀は各々二十種があるので合わせて六十種。それに蔬菜と果樹の実で穀を補うものとなるものが各々二十種。総計して百種。ゆえに詩経に云う、その百穀を播け、と。百穀とは穀種衆種の大名である。』⁵⁸⁾と説明があり(^{注52)}、『斉民要術』⁵⁸⁾などがこの説を引用する。これを受けて、『初學記』¹⁰⁾草部五穀、『太平御覧』⁴⁾百穀部、『事文類聚』⁴⁵⁾穀菜部、『小學紺珠』⁸⁾動植類¹⁷⁾などが「物理論に曰く」として(^{注53)}、また『爾雅翼』⁷⁴⁾(南宋1174年頃)釋草は「古人説」として(^{注54)}説明している。別説に『五雜俎』⁴⁶⁾は五穀がそれぞれ二十種で総計百種になると記す¹⁷⁾(^{注55)}。

穀物注

五穀として挙げられる穀物については前々稿²⁷⁾及び前稿²⁸⁾で述べたが、ここではその他の名数で挙げられる穀物を中心にして再度まとめて述べる。

名数で挙げられる穀物の内容の考察は、『藝文類聚』³⁾百穀部、『九穀考』²⁹⁾、『經典穀名考』¹⁶⁾などに詳しい。穀物の植物学については『爾雅翼』⁷⁴⁾、『本草綱目』⁵³⁾、『本草綱目啓蒙』⁷⁵⁾(享和3年-1803~文化2年-1805)、『中国食物史の研究』⁶²⁾、松本『支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名稱ノ研究』⁴³⁾、『和名抄』⁷⁶⁾(承平元年-931~天慶元年-938)、『箋注倭名類聚抄』⁷⁷⁾(文政10年-1827)、『日本古代穀物史の研究』⁵²⁾、『和漢三才図会』³¹⁾、『本朝食鑑』³⁰⁾、『図説 草木名彙辞典』²⁰⁾などに詳しい。

*1 穀

『説文』³⁸⁾に〈穀、續也、百穀之總名也、从禾穀聲。〉¹⁹⁾とあるように、穀という字はあるいはアワ(粟)に、あるいは穀物全体に用いられる⁴²⁾。堅い穀に包まれた草木の実の意である³⁹⁾50)。

*2 黍

モチキビ。稗に毛があり、粘るキビのこと。『説文』³⁸⁾に「禾の属にして黏りある者なり。大暑を以て種う。故に之を黍と謂ふ。」²⁹⁾39)43)とある。黍の音は暑の音と同じである³⁹⁾43)。モチキビは製粉して餅や団子にする²⁹⁾78)。なお、粘りけの少ないキビは糜¹⁰⁾と呼ぶ¹⁹⁾29)。黍にはいくつもの種類があり、『和名抄』⁷⁶⁾77)に丹黍(一名赤黍、一名黄黍、阿賀歧々比)、秬黍(一名黒黍、久呂岐比)として記されている³⁰⁾。『本草綱目』⁵³⁾穀の二 黍の積名に〈赤黍を麩-音は門(モン)-といひ、糜-音は糜(ピ)-といひ、白黍を苜-音は起(キ)といひ、黒黍を秬-音は距(キョ)-といひ、一稔二米を秠-音は疋(ヒ)-といふ。(いづれも爾雅)〉とある。『本朝食鑑』³⁰⁾穀部穀之二黍にもキビについてまとめがある^(注56)。

*3 稷

ウルチキビ。稗に毛が無く、粘らないキビのこと。『説文』³⁸⁾に「稷、齋なり。五穀の長なり。」⁴³⁾39)とある。精白して飯、粥とする⁴³⁾78)。稷に対応する植物名には諸説あるが、『本草綱目』⁵³⁾には「稷と黍とは同類(イネ科)の異種である。粘るものを黍(モチキビ)といい、粘らないものを稷(ウルチキビ)という。稷は飯にするとよく、黍は酒に醸すとよい。ちようど稲に稷と糯とがあるようなものである。」とある³¹⁾。なお

『和名抄』⁷⁶⁾77)には〈本草云、稷米 去聲 一名稌、歧比乃毛知、蘇敬曰、一名稌、音祭)とあり、ここでは稷はモチキビになっている。『經典穀名考』¹⁶⁾は稷をシロキビとする。また、程瑤田『九穀考』²⁹⁾は稷を高梁とし^(注57)、『大漢和辞典』¹⁹⁾は『説文通訓定聲』に引かれる程瑤田の説からタカキビ、高梁とする。松本⁴³⁾や『字通』³⁹⁾も今の高梁^{コウリヤン}としている。しかし、『中国食物史の研究』⁴²⁾は〈程瑤田が稷にコウリヤンをあてて以来(『九穀考』)、これに賛成する人も少なくないが(たとえば段玉裁の『説文』注)これはすこしむりで、コウリヤンはけっしてこんな古い作物ではない。)と考察している。稷がタカキビ(高黍)なら、モロコシキビ(蜀黍)、コウリヤン(高梁)などとも呼ぶことになるが⁵⁷⁾、『本草綱目』⁵³⁾では稷、黍、蜀黍はそれぞれ別項目になっており別種としており、『箋注倭名類聚抄』⁷⁷⁾も「古の稷は今の蜀黍と同じではない」と注釈している。

*4 粱

ウルチオオアワ。『説文』³⁸⁾に〈粱、禾米也、从米粱省聲。〉¹⁹⁾39)とある。『大漢和辞典』¹⁹⁾によると〈凡そ穀實は莖に在るを禾、穀に在るを粟、仁を米、精製したものを粱といふ。〉『和名抄』⁷⁶⁾77)にも〈粱米(中略)阿波乃宇留之漘)とあり、粱はアワの稷種である。なお、アワのうちコアワを粟^{ぞく}といい*18、モチアワは秠^{じゆつ}という*20。

*5 稻(稻)

モチイネ。イネの糯種。稌*14ともいった。『説文』³⁸⁾に〈稻、徐也)19)39)とあり、『説文通訓定聲』^{38a)}に〈稻、今蘇俗、凡粘者不粘者、統謂之稻-、古則以粘者-曰稻、不粘者-曰秠、云云、)19)とあるように、今は稻をイネの総称としていうが、古代中国ではイネの粘るものを稻あるいは稌*14といい、粘らないものを秠*20といたのである³⁹⁾53)。

*6 菽

マメ。豆類の総称²⁾36)43)。特にダイズ(大豆)を指す²⁾36)。『本草綱目』⁵³⁾穀部穀の三 大豆の積名に〈禾俗に菽と書く。時珍曰く、豆といひ、禾といふはいづれも菽穀の総称)とある。また、『本草綱目』穀部穀の三 赤小豆に「時珍曰く、案ずるに、詩に云う。黍稷稻粱 木麻菽麦。此れ即ち八穀也。董仲舒の注しいう菽は大豆である。」^(注32)とある。『中国食物史の研究』⁶²⁾はマメについて〈ダイズは新嘗祭にはもちいられない。比較的新しい食物である。明堂の月次祭式にはもちいられているので、少なくとも戦国時代には

さかのほれよう。(中略)ただし、古典人のいう大、小マメ(たとえば『周礼』鄭注)はかならずしも今日のダイズ、アズキをさすものではない。ただ大形の豆、小形の豆というだけのものである。注意を要する。)と述べている。

*7 麦

ムギ。オオムギ(大麦)とコムギ(小麦)がある。

*8 秬

秬黍の略称でモチクロキビ(黒黍) 31)53)また、一つのもみがらの中に実の二つあるクロキビ(黒黍) 19)43)。『説文』38)に「黒黍なり。一稔二米、以て醸すものなり」39)とあり、『集韻』79)に「𪎎、説文、黒黍、一稔二米、以醸也、或作秬」19)とある。また、『春秋左傳』37)昭公四年「秬黍」の杜氏注に「秬、黒黍也」19)とある。『和名抄』76)77)に「秬黍 本草云秬黍、上音巨、一名黒黍久呂岐比」とある。

*9 秠

一つのもみがらの中に実の二つあるクロキビ(黒黍) 30)31)53)。『説文』38)に「秠、一稔二米、从禾丕聲、詩曰、誕降嘉種、惟秬惟秠、天賜后稷之嘉穀也。」19)とあり、『集韻』79)に「秠、黒黍也。」19)とある。また、『詩經』33)34)35)大雅 生民之什の孔穎達の疏に「秬、是黒黍之大名、秠、是黒黍之中有二米者、別名之為秠」19)とある。『經典穀名考』16)はシロキビとする。

*10 糜

モチアカキビ。『説文』38)に「糜、稌也、从黍麻聲」19)。赤黍、丹黍とも書く31)。『和漢三才図会』31)に「赤黍は(中略)糜にするとよいが、飯にするとよくない31)。粘りついてとれにくい。また酒に醸ったり、糕にしたりする。」とある。

*11 苽

モチシロキビ53)19)。『説文』38)に「苽、白苗嘉穀也、从艸己聲。」とあり、『爾雅』80)にも「苽、白苗」とあり、その注に「今之白粟」とある19)。『小學紺珠』8)四穀は苽と記す。日本の書であるが、『本朝食鑑』30)に白苽の語があり、『和漢三才図会』31)に白黍を苽というとする。

*12 禾

イネあるいはアワ。イネ科の植物の穂を表す象形文字である39)。『説文』38)に「禾、嘉穀也」3)19)とあるように穀類の最も良いものである。黍・稷・稲などの字には、いずれも禾がつくように、すべてイネ科である。中国北部の粟作地帯では穀の字とともに粟を表し62)、中国南部の稲作地帯では穀の字とともに稲を表す。こ

こはアワ42)43)か。

*13 稌

イネ(稲)。『説文』38)に「稌(と)、稻也」19)とある39)。稌の字はイネのウルチ種にもモチ種にも用いられる19)39)43)。たとえば『集韻』79)には「稌、稷稻也。」19)とあり、モチイネにいう。一方、『周礼』32)天官食醫の「牛宜稌」の鄭玄注に「鄭司農云、稌、粳也。爾雅曰稌、稻」19)とあり、ウルチにもいう。祭祀に牛を供えるときは、稌(粳)をあわせとりそろえることが定めてあった39)。

*14 菰(菰)

マコモの実43)62)。『説文』38)に「菰は雕菰なり。一名蔣。从艸瓜聲。」19)39)とある。

*15 稗子

ノビエ75)。稗とも書く。『説文』38)に「禾の別なり」19)39)とある。『本草綱目』53)や『和漢三才図会』31)に稗の項がある。

*16 藎子

ミノ19)52)76)77)。ミノゴメ19) (ムツオレグサ81)・タムギ81)。イネ科の植物。茵草の異名19)53)。『和名抄』76)77)稲穀部稲穀類に藎子の項がある19)52)。

*17 粟

コアワ。粟はもと稷につくった。『説文』38)に「粟、嘉穀實也、从畷从米、孔子曰、粟之為言、續也。」とある。粟の字はもともとは「もみのままの穀物」の意で穀物の総称であった19)42)。アワにはオオアワとコアワとがあり、『本草綱目』53)が記すように、古代中国では粟を黍、稷、粱、秠の総称とした。漢以降、実の大きさによりオオアワを「粱」と呼び、コアワを「粟」と呼んで区別したが31)、明代では粘るものを秠といい、粘らないものを粟(または仙粟(せんぞく))といった31)。日本では『和名抄』76)77)に「粟(中略)阿波禾子也」とあり、近世以降は『和漢三才図会』31)巻之百三穀類粟及び『本朝食鑑』30)穀之一 粟・穀之二 粟が記すように粘らないアワの総称として「粟」の字が使われ、粱の字は使わない。

*18 烏麻

黒麻、すなわちクロゴマ(黒胡麻)のことである82)。『本草綱目』53)胡麻の項に烏麻の語が見られる。『和名抄』64)は胡麻に「五末」(字古万)と訓ずる75)77)。

*19 秠

モチアワ75)。オオアワ(粱)ならびにコアワ(粟)のモチ種。朮とも書く。『説文』38)に「稷の黏れる者なり。禾に従ふ。朮は象形。朮、秠或いは禾を省す」39)

とある。『和名抄』⁷⁶⁾に〈稊 爾雅注云、稊、音述、阿波乃毛知 黏粟也。』『本草綱目』⁵³⁾によると、稊は飯には適当ではないが、餅や酒を作るの適するものとして用いられた⁷⁸⁾。『和漢三才図会』³¹⁾稊も『『本草綱目』(穀部稷粟類)に次のようにいう。稊(イネ科)とはつまり梁・粟の粘るものである。飯にするとよくなく、酒にを作るとよい。糖で熬って糍糕にして食べる。赤・白・黄の三色がある。』と記す。『大漢和辞典』¹⁹⁾や『字通』³⁹⁾によると、稊は、もちごめ、高粱の粘るもの、あるいはきびの粘らぬものを指すこともある。

⁸²⁰⁾稊

ウルシネ。イネのウルチ(梗)種。『字通』³⁹⁾に〈[説文]七上に稊を正字とし「稻の属なり」とし、字はまた梗に作るという。梗は俗体の字であるが、のち多くこの字を用いる。〉とある。『説文通訓定聲』^{38a)}には〈稻、今蘇俗、凡粘者不粘者、統謂之稻、古則以粘者曰稻、不粘者曰稊、云云。〉¹⁹⁾とある。『本草綱目』⁵³⁾稊の積名にも「稊 梗と同じ」とある。

注及び引用文献 (注：以下アンダーラインは著者による)

(注1) 『太平御覧』⁴⁾卷第八百三十七 百穀部 穀は『礼記』月令を次のように引く。

禮記月令孟春天子乃以元日祈穀于上帝孟夏驅獸無害五穀獸粟鹿之属食穀苗驅之令勿害也孟秋農乃登穀天子嘗新先薦寢廟

『藝文類聚』³⁾百穀部 穀にも『礼記』を引いた記述がある。

禮記曰、孟春、天子乃以元日祈穀于上帝、謂以上辛郊天也、郊祀後稷、以祈農事、故蟄而郊、郊而後耕、上帝太微之帝、傳曰、夫郊祀後稷、以祈農事、故啓蟄而郊、郊而後耕、又曰、孟秋、農乃登穀、天子嘗新、先薦寢廟、黍稷之属於是始薦、命百官始收斂、候秋氣始收斂

(注2) 『墨子』²⁾卷之一 七患 第五

凡五穀者、民之所仰也、君之所以為養也。故民無仰則君無養、民無則不可事。故食不可務也、地不可力也、用不可節也。

五穀盡取、則五味盡御於主、不盡取、則不盡御。一穀不取謂之饑、二穀不取謂之罕、三穀不取謂之凶、四穀不取謂之餓、五穀不取謂之饑。歲饑則仕者大夫以下、皆損祿五分之一、罕則損祿五分之二、凶則損祿五分之三、饑則損祿五分之四、饑

則盡無、稟食而已矣。(注：調点は新釈漢文大系50『墨子 上』^{5b)})

(注3) 『穀梁傳』⁶⁾襄公 二十四年

大饑、五穀不升為大饑。弁成也、一穀不升謂之嘆、嘆不足貌。○嘆去聲。反、二穀不升謂之饑、三穀不升謂之饑、○饑音近、四穀不升謂之康、康虛、五穀不升謂之大侵。侵傷(注：調点は『大漢和辞典』¹⁹⁾)

(注4) 『韓詩外傳』⁹⁾卷第八

一穀不升、謂之饑、二穀不升、謂之饑、三穀不升、謂之饑、四穀不升、謂之饑、五穀不升、謂之饑。大侵(注：調点は『大漢和辞典』¹⁹⁾五穀不升による。)

(注5) 『古今合璧事類備要』⁷⁾別集 卷之五十七

穀 附 禾 嘉禾 稼穡 黍稷 稻
梁 粟 粳 秫 米

[格物總論]穀種之美者也、其為種也不一、攷之前載、有言三穀者、梁・稻・菽、是也。

(注：調点は『大漢和辞典』三穀¹⁹⁾)

有言五穀者、麻・黍・稷・麥・豆、是也。

有言六穀者、稻・黍・稷・梁・麥・苽、是也。

有言二九穀一者、稷・秫・黍・稻・麻・大小豆・大小麥、是也。

有言百穀者、又、包舉三穀各二十種、為六十。蔬果之實、助穀各二十、是也。

(注6) 『本朝食鑑』^{30b)}卷之一 穀部之一

稻

[集解] 古謂三穀者、梁、稻、菽、是也、

五穀、麻、黍、稷、麥、豆、是也、

九穀者、稷、秫、黍、稻、麻、大小豆、大小麥、(注：調点は『廣文庫』三穀¹⁷⁾)

(稲 伊禰(いね)と訓(よ)む。[集解] 昔三穀とい

ったのは、梁・稻・菽(まめるい)のことである。五

穀とは、麻・黍(きび)・稷(たかきび)・麥・豆のこ

とで、九穀とは、稷・秫(もちあわ)・黍・稻・麻・

大豆・小豆・大麦・小麦のことをいう。)^{30a)}

(注7) 『和漢三才図会』^{31a)}卷第三百三 穀(穀)菽類

『本草綱目』(穀部)に次のようにいう。太古の民は穀粒を食べることを知らず、獸肉を食べ、血を飲んでた。神農氏がでて始めて草を嘗め、草から穀を区別し、民に耕し植えることを教えた。また草を嘗めて葉草を区別し、それによって民の病や死を救った。軒轅氏(黄帝)が出て民に烹飪を教え、薬方・調剤の仕方を教え、こうして民は始めて養生の道

食べ物の名数

を得ることができた。周官(『周礼』)には、五穀・六穀・九穀の名があり、詩人に八穀・百穀の詠があつて、これによって穀の種類は非常に多くあることがわかる、と。

五穀とは麻・黍・稷・麥・豆
九穀とは稊・稻・小麦・小豆〔右の五穀に以上を加えて九穀という〕

三穀とは梁・稻・菽
〔今いう〕五穀とは稻・大麦・小麦・大豆・小豆である。

△思うに、炙穀子(唐代元和の詩人王叡のこと)や『酉陽雜俎』にいう九穀の名は、右と異同がある。

- (注8)『周礼』³²⁾夏官 司馬下 職方氏
職方氏困學紀聞云漢樊毅修西嶽廟記作識方氏掌天下之圖以掌天下之地辨其邦國都鄙四夷八蠻七閩九絡五戎六狄之人民與其財用九穀六畜之數要周知其利害(中略)
東南曰揚州(中略)其穀宜稻
正南曰荊州(中略)其穀宜稻
河南曰豫州(中略)其穀宜五種〔鄭玄注〕五種 黍稷菽麥稻
正東曰青州(中略)其穀宜稻黍
河東曰兗州(中略)其穀宜四種〔鄭玄注〕四種 黍稷稻麥
正西曰雍州(中略)穀宜黍稷
東北曰幽州(中略)其穀宜三種〔鄭玄注〕三種 黍稷稻
河内曰冀州(中略)其穀宜黍稷
正北曰并州(中略)其穀宜五種〔鄭玄注〕五種 黍稷菽麥稻也

- (注9)『小學紺珠』⁸⁾卷十 動植類
五穀 五種
麻金、黍火、稷土、麥木、豆水、○周礼疾醫五穀、荀子序五種、漢食貨志、五穀注、
春麥、夏菽、季夏稷、秋麻、冬黍、○月令、五時食、穀
稻、稷、麥、豆、麻、○楚辭大招五穀注、
黍、稷、菽、麥、稻、○職方氏豫州宜五種、史記黃帝藝五種、月令出五種
孟子 四種、兗州無菽 三種、幽州無黍(注：調点は『廣文庫』¹⁷⁾)

- (注10)『小學紺珠』⁸⁾卷十 動植類
四穀
秬、秠、糜、芑○詩生氏降誕嘉種、箋云、(注：調点は『廣文庫』¹⁷⁾)

(注11)他の『節用集』には四穀の標記はない。

- (注12)『漢書』卷二十五下 郊祀志⁴⁰⁾
又種五梁禾於殿中、師古曰、玉(五)色禾也、谷永所謂耕耨五德也。各順色置其方面、先醴鶴鬯、毒冒、犀玉二十餘物、漬種、師古曰、醴、古煮字也。鬯、古醴字也。謂醴取汁以漬穀子也。毒音代、冒音莫內反。計粟斛成一金、言此黃帝穀德之術也。(注：調点は『和刻本漢書』^{40a)})

- (注13)『周礼』³²⁾天官 冢宰第一 膳夫
膳夫掌王之食飲膳羞 以養王及后世子 凡王之饋食用六穀 膳用六牲 飲用六清 羞用百二十品 珍用八物 醬用百有二十齏〔鄭玄注〕進物於尊者(中略)鄭司農曰羞進也 六穀黍稷梁麥苽 苽彫胡也

- (注14)『周礼』³²⁾地官 司徒下 舍人
掌米粟之出入辨其物〔注〕九穀六米別為書〔疏〕掌米至其物○釋曰大宰九職有九穀月令有五穀今正言粟者粟即黍也爾雅釋草稷也稷為五穀之長故特舉以配米也其實九穀皆有○注九穀至為書○釋曰九穀之名已見大宰注今云六米者九穀之中黍稷稻梁苽大豆六者皆有米麻與小豆小麥三者無米故云九穀六米別為書釋經辨其物也

- (注15)『初學記』¹⁰⁾五穀第十
凡王之膳食用六穀鄭司農云、稻・黍・稷・梁・麥・苽

- (注16)『鶴林玉露』⁴⁴⁾卷十三
○穀菹禽獸
周禮註、六穀、稌、黍、稷、梁、麥、苽¹⁷⁾

- (注17)『事文類聚』後集卷之二十二⁴⁵⁾ 穀菜部
禾 稼
穀 黍 苽
羣書要語 九穀 三農生九穀鄭司農注 稷林黍稻麻大小豆大小麥周禮 六穀 凡王之膳食用六穀鄭司農注 稻黍稷梁麥苽周禮 五穀 以五味五穀五葉養病鄭司農注 麻黍稷麥豆同上 百穀 梁者黍稷之總名稻者漑種之總名菽者衆豆之總名三穀各二十種為六十蔬果之實助穀各二十為百穀楊泉物理論五穀皆熟為有年穀梁載南畝播百穀詩載芡亟其乘屋其始播百穀七月
穀賤傷農昭帝詔

- (注18)『小學紺珠』⁸⁾卷十 動植類
六菜 六菜 六食
稌、黍、稷、梁、麥、苽、○膳夫注、食醫、牛宜、稷、犬宜、梁、鴈宜、麥、(注：調点は『廣文庫』¹⁷⁾)
魚宜、苽
六菜 小宗伯六齏注黍稷稻梁麥苽六者

六食^{六穀之飯}○^{食醫}
食音嗣^{饑人}

(注19)『羣書拾唾』¹¹⁾卷之十 動植食物第十は次のように五穀、六穀、九穀を挙げる。

五穀

禾 麻 粟 麥 豆 一云黍稷麻麥豆^{月令四時所食}

六穀

黍^{稷也} 稷^{果也} 稻^{一作秬} 粱^{一作秠} 苽^籼 苽^籼 麥^胡

九穀

黍 稷 稻 粱 麻 麥 秫 苽 豆^{又按爾雅}

翼云梁者黍稷之總名、稻者漑種之總名、苽者衆豆之總名、三穀各二十種、爲六十、疏果之屬、助穀各二十、凡百穀

○五穀者以五行所屬而言九穀者以三農所生而言百穀者以其多而言

(注20)『五雜俎』⁴⁶⁾卷之十一 物部三

五穀者、稻、黍、稷、麥、苽也、鄭司農注¹²⁾周禮、謂麻、麥、黍、稷、豆、而不及¹³⁾稻、豈鄭未¹⁴⁾至南方耶、王之膳食用¹⁵⁾六穀、鄭注¹⁶⁾、稻、黍、稷、粱、麥、苽、又三農生¹⁷⁾九穀、鄭注¹⁸⁾、稷、秫、黍、稻、麻、二豆、二麥、其說互¹⁹⁾異、恐亦以臆²⁰⁾斷耳、(注：訓点は『廣文庫』¹⁷⁾ほか) 五穀とは稻・黍・稷・麥・苽である。²¹⁾鄭玄が、『周令』に注して、麻・麥・黍・稷・豆についていっているが、稻には説き及んでいない。鄭は南方には行っていなかったのであろうか。王の食膳には、六穀を用いる。鄭注には「稻・黍・稷・粱・麥・苽」とある。また、「三農 九穀を生ず」について、鄭注には「稷・秫・黍・稻・麻・二豆(大豆・小豆)・二麥(大麦・小麦)」とあり、その説は互いに異なっている。おそらく臆測でいったものにちがいない。^{46b)}(注：この書で「鄭司農」とあるのは後漢の「鄭玄」。「六穀、鄭注」の鄭は「鄭玄」¹³⁾。「九穀、鄭注」で挙げる九穀は鄭玄が「鄭衆」の説としてあげたもの⁴²⁾。)

(注21)『太平御覽』⁴⁾卷第八百三十七 百穀部一 穀

周易日月麗乎天百穀草木麗乎土
尚書曰稷降播種農食嘉穀
毛詩谷風信南山曰既沾既足生我百穀
毛詩甫田曰播厥百穀既庭曾孫是若
周禮天官曰、太宰以²²⁾九職任²³⁾萬民、一曰、三農
生²⁴⁾九穀、鄭司農云、九穀、稷、黍、秫、稻、麻、大小豆、大小麥、
凡王之膳食用²⁵⁾六穀、鄭司農云、稻、黍、粱、麥、苽、(注：訓点は『廣文庫』¹⁷⁾)

(注22)『古今類書纂要』⁴⁷⁾卷之七 飲食部

穀食 五穀 麻黍稷麥豆又白黍稷稻麥苽 六穀 黍稷稻粱麥豆 九穀 黍稷稻粱麻大小麥²⁶⁾
麻豆大(注：麻が重複。最初の麻は秬の誤刻か)

(注23)『和爾雅』²⁶⁾卷之六 米穀門 第十八

五穀 谷粱 苽 苽 苽 苽 豆
今按月令以爲五穀、周禮注²⁷⁾以麻、○六穀見²⁸⁾于黍稷麻豆黍黍黍黍黍黍爲五穀、
麥 麥 稻 粟 苽 又鄭氏說²⁹⁾黍 稷 粱 苽 胡 苽 苽
○八穀見³⁰⁾于黍 稷 稻 粱 麻 苽 麥 烏 麻
○九穀 周禮 主³¹⁾農 黍 稷 稻 粱 麻 大豆
小豆 小麥 又周禮 注³²⁾黍稷秫稻麻大小豆麻麥稻粱苽大小豆 黍稷以³³⁾黍稷稻粱三 豆二麥³⁴⁾爲九穀 (注：六穀の粟は麻の誤り)

(注24)『節用集大全』⁴⁸⁾利集第九 數量

六穀 穀 拾 黍 稷 麥

なお、『節用集』は諸本によって取りあげる名数とその内容が異なる。古本『節用集』には五穀以外の記載がないが、近世の『節用集大全』⁴⁸⁾(延宝8年-1680)は五穀、六穀、八穀を記載している。『合類節用集』³⁶⁾(1680年)には四穀、五穀を挙げるが、六穀は挙げられていない。『書言字考節用集』¹⁴⁾(享保2年-1717) 卷第十 數量門は五穀、六穀、八穀、九穀を挙げる。

(注25)『書言字考節用集』¹⁴⁾卷第十 數量門

六穀 ロクコク 稻、黍、稷、粱、麥、瓜⁴⁹⁾

(注26)『經典穀名考』¹⁶⁾卷之上

六穀⁵⁰⁾謂⁵¹⁾。黍○稷○稻○粱○麥○苽○之六米⁵²⁾也○

(注27)『周礼』²⁶⁾天官 家宰下 食醫

食醫掌⁵³⁾和⁵⁴⁾王之六食・六飲・六膳・百羞・百醬・八珍之齊。(注：訓点は『大漢和辞典』六食¹⁹⁾)

(注28)『周礼』³²⁾地官 司徒下 饑人

饑人掌⁵⁵⁾凡祭祀共盛、共王及后之六食。〔鄭玄注〕六食六穀之飯

(注29)『周礼』³²⁾春官 宗伯第三 小宗伯

小宗伯之職掌⁵⁶⁾建國之神位右社稷左宗廟(中略)辨⁵⁷⁾六齋之名物與⁵⁸⁾其用、使⁵⁹⁾六官之人共⁶⁰⁾奉之。〔鄭玄注〕齋、讀爲⁶¹⁾梁、六梁謂⁶²⁾六穀、黍・稷・稻・粱・麥・苽。○苽音⁶³⁾孤。(注：訓点は『大漢和辞典』六齋¹⁹⁾)

(注30)『小學紺珠』⁸⁾卷十 動植類

六米 黍 稷 稻 粱 苽 大豆○周礼舍人注⁶⁴⁾六者皆有米麻小豆小麦⁶⁵⁾三者無米

(注31)『小學紺珠』⁸⁾卷十 動植類

八穀

黍、稷、稻、粱、禾、麻、菽、麥、○本草、
稻、黍、大麥、小麥、大豆、小豆、粟、麻、
○大象注(注：訓点は『廣文庫』17)

(注32)『本草綱目』53)卷二十三 穀之二
稷 (別録上品)

【集解】弘景曰。稷米(中略)詩云。黍稷稻粱
禾麻菽麥。此八穀也。

『本草綱目』53)卷二十四 穀之三

赤小豆 (本經中品)

【釋名】(中略)時珍曰。案詩云。黍稷稻
粱 禾麻菽麥。此即八穀也。董仲舒註云。菽
是大豆有兩種。小豆名荅(荅)有三四
種。〈時珍曰く、按ずるに、詩に『黍稷稻粱、禾麻
菽麥』とあって、これは即ち八穀である。董仲舒の註
に『菽とは大豆で兩種あり。小豆は荅と名付けて三四
種ある』とある。〉53c)

(注33)『經典穀名考』16)卷之上 無八穀之名之辨

八穀之名。古無之。有。南梁陶弘景。注本草
始曰。詩曰。黍稷稻粱。禾麻菽麥。此八
穀也。又明李時珍。著本草綱目。序其
穀部曰。周官有五穀六穀九穀之名。
詩人有八穀百穀之詠。其曰五穀六穀九
穀百穀者。聞命矣。至謂詩有八
穀之詠。即三百篇無所見。唯、豳風七
月之篇。有黍稷重穋。禾菽麥之句。恐弘
景。錯誦重穋。為稻粱者也。時珍
不察。以祖述者。誤之甚也。(八穀の名
は古へは有ることが無い。南梁の陶弘景は本草に注し
て始めて曰う。詩に曰く黍稷稻、粱禾麻菽麥、此れ八
穀なり。また、明の時珍は『本草綱目』を著し、その
穀部の序に周官の制度には、五穀、六穀、九穀などの
名目があり、詩人の歌詠には、八穀、百穀の詠有りとい
う。その五穀、六穀、九穀、百穀と曰う者は命を聞
けり。詩に八穀の詠有りと言うに至っては、八穀之詠
は詩三百篇に見るところはない。唯、豳風七月の篇に
黍稷重穋禾菽麥の句がある。おそらくは弘景は重穋を
錯誦(錯誦)して稻粱としたものであろう。時珍が察
せずして祖述したのは誤りの甚だしき也。)

(注34)『五雜俎』46)卷之十一 物部三は(注20)、(注
46)及び(注55)の記述に続いて次のように記す。
甘石星經又謂、八穀應八星、八穀者、
黍、稷、稻、粱、麻、菽、麥、鳥麻也、其星
在河車之北、明則俱熱、(注：訓点は

『廣文庫』17)ほか)

(注35)『太平御覽』4)卷第八百三十七 百穀部一 穀
は

○星經曰 八穀八星在五車北主黍・稷・稻・粱
・麻・菽・麥・鳥麻、星明則俱熱(注：訓点は『大
漢和辭典』八穀19))

とあるという4)、『九穀考』29)稷も

星經八穀八星在五車北主黍稷稻粱麻菽麥鳥麻
と記すが、『通占大象曆星經』83)卷上・下では未見。

『晋書』54)志第一 天文上 中宮には

五車南六星曰諸王，察諸侯存亡。其西八星曰八
穀，主候歲。八穀一星亡，一穀不登。

とあり、八穀(星)の語がある18)。

(注36)『唐開元占經』55)卷六十九 甘氏中宮占五

八穀星占六十五

甘氏曰八穀八星在五車北八穀稻黍稷大麥
小麥大豆小豆麻子

(注37)『宋史』56)第四十九 志第二 天文二 紫微垣

八穀 八星，在華蓋西，五車北，一曰在諸王
西。武密曰：「主候歲豐儉，一稻、二黍、三大
麥、四小麥、五大豆、六小豆、七粟、八麻。」
甘氏曰：「八穀 在宮北門之右，司親耕，司候
歲，司尚食。」星明，吉；一星亡，一穀不登；
八星不見，大饑。客星入，穀貴。彗星入，為
水。黑雲氣犯之，八穀 不收。

(注38)『大和本草』15a)卷之二 論用藥

數目類 草木禽獸及人身肢體疾病有數目之類
學者宜記誦輯其大略於此

五穀 禾 麻 粟 麥 豆 素問藏氣法時論曰
五穀為養五畜為益五菜為充五果為助○
月令以黍稷麻麥豆為五穀 孟子註以黍
稷菽麥稻為五穀 楚辭註以稻稷麥豆麻
為五穀

五畜 (略)

五菜 (略)

五果 (略)

八穀 稻穀大豆小豆大麥小麥粟麻 小學紺珠 ○日

本紀神代卷二稻麥大豆粟稗ヲ

記ス是上古ヨリ我邦ニ所在也日本紀欽明天皇
十二年以麥種一千斛賜百濟可見自上古
世有此種也(注：この書の「穀」は「黍」の誤
り。15ab))

九穀 稷 秫 黍 稻 麻 大小豆 大小麥 周

禮鄭玄註(注：この「鄭玄註」は鄭玄が「鄭衆」の
説として挙げた九穀(注42)。

五味 (略)

(注 39) 『新刊節用集大全』⁴⁸⁾波集第三

八穀ハク穀コク時珍曰 黍キヌ 稷キヌ 稻イネ 粱イネ 禾コメ
麻アサ 菽アズキ 麥コムギ 此即八穀也見エテリ本草綱目ニ
『書言字考節用集』¹⁴⁾卷第十 數量門
八穀 ハッコク 黍キヌ 稷キヌ 稻イネ 粱イネ 禾コメ
麻アサ 菽アズキ 麥コムギ⁴⁹⁾

(注 40) 『齊民要術』^{58b)}卷一 種穀第三 種穀

汜勝之書曰 小豆コメ忌イ卯卯 稻麻イネアサ忌イ辰辰 禾コメ
忌イ丙丙 黍キヌ忌イ丑丑 稷キヌ忌イ寅寅 小麥コムギ忌イ戊戊
大麥コムギ忌イ子子 大豆ダイズ忌イ申申 凡ソ九穀ク
有ニ忌イ日日 種ル之ヲ 不ルハ 避ニ其忌ヲ 則
多ク傷敗ス 此非ニ虛語ニ也 其自然ナル者ナリ 燒ケハ
黍稷キヌ則レ害ス 瓠ウリ 史記曰陰陽之家 拘リ而多ク忌
止レ可ク知ル其梗槩ヲ 不レ可ク委曲ニ從ニ之ヲ 諺ニ曰
以スル時ヲ及ヒ澤ヲ 為ニ上策ニ也

(注 41) 『事林廣記』⁵⁹⁾庚集 卷之三 一六項¹⁸⁾

種ニ九穀ノ法
凡種ニ九穀ノ宜ニ成取滿平ニ定ニ日吉ニ以テ生壯長日ヲ
種ト者ノ多實老惡死日種者取薄ヲ忌日ニ 種者敗傷
若不レ避ニ忌ヲ徒ラ勞メ無ク成ル
小豆忌イ卯 大麥忌イ戊 稻麻忌イ辰 稷忌イ寅
大豆忌イ申 小麥忌イ子 晚禾忌イ丙丙 黍忌イ丑
九穀生日
汜勝之書曰 禾生ニ於寅ニ (中略)
又曰 黍稷并稻生ニ於巳ニ (中略)
又曰 大麥小麥生ニ於亥ニ (中略)
又曰 大豆小豆生ニ於申ニ (中略)

(注 42) 『周礼』³²⁾天官 冢宰第一 大宰

以九職任萬民一曰三農生九穀 二曰園圃毓草木
三曰虞衡作山澤之材四曰藪牧養蕃鳥獸五曰百工
飭化八材六曰商賈阜通貨賄七曰嬪婦治絲枲八
曰臣妾聚斂疏材九曰閭民無常職轉移執事〔鄭玄
注〕任猶俾也鄭司農云三農平地山澤也九穀黍稷稻
麻大小豆大小麥八材珠曰切象曰璫九穀無稷大麥而有粱
苽 (中略)〔賈公彥疏〕鄭司農云 三農平地山澤也
者 以其積石曰山水鍾曰澤不生 九穀 故後鄭不從之
也云 九穀 黍稷稻麻大小豆大小麥者此九者後鄭以
為無稷大麥而有粱苽

(注 43) 『小學紺珠』⁸⁾卷十 動植類

九穀
黍、稷、秫、稻、麻、大小豆、大小麥、○^大粟九穀ノ類
農注苽 康成謂無ニ稷ニ大麥ニ而有ニ粱ニ苽ニ 影
胡也 古今注、黍、稷、稻、粱、三豆、三麥、(注：調点は『廣文
庫』¹⁷⁾ほか)

(注 44) 『書言字考節用集』¹⁴⁾卷第十 數量門

九穀 キウコク 黍キヌ 稷キヌ 稻イネ 粱イネ 麻アサ
大豆 小豆 大麥 小麥

(注 45) 『周礼』³²⁾天官 冢宰下 食醫

凡膳食之宜、牛宜レ稌、羊宜レ黍、豕宜レ稷、犬
宜レ粱、鴈宜レ麥、魚宜レ苽 (およそ膳を会わせる
に宜しきは、牛は稌に宜しく、羊は黍に宜しく、豕は
稷に宜しく、犬は粱に宜しく、鴈は麥に宜しく、魚
は苽に宜しく)

(注 46) 『五雜俎』⁴⁶⁾卷之十一 物部三は (注 20) の記述に続いて

炙穀子云、九穀ノ者、黍、稷、麻、麥、稻、粱、
苽、大小豆ナリ、西陽雜俎ニ云、九穀ノ者、黍、稷、
稻、粱、三豆、二麥ナリ、然北方ノ之穀、尚レ有レ
粟、有ニ有ニ葛林ニ、有ニ蕎麥ニ、而レ豆ノ之屬、有ニ
黃豆、菉豆、黑豆、江豆、青豆、扁豆、豌豆、
蠶豆、不レ齊ニ三ノ也、南方雖レ止ニ於稻
米、而稻之中已有ニ十數種ニ、矣、(注：調点は
『廣文庫』¹⁷⁾ほか、炙穀子は唐の王穀の号) (炙穀子は
「九穀とは、黍・稷・麻・麥・稻・粱・苽・大小豆で
ある」といい、『西陽雜俎』には「九穀とは、黍・稷
・稻・粱・三豆・二麥である」とある。しかし、北方
の穀類には、なお粟があり、葛稷があり、蕎麥があ
る。しかも、豆の類には、黃豆・菉豆・黑豆・江豆・
青豆・扁豆・豌豆・蚕豆があり、三種類ぐらいのこと
ではない。南方では稲米にとどまるけれども、稲の中
には十数種類があるのである。) ^{46b)}

『大漢和辞典』¹⁹⁾九穀は

黍・稷・麻・麥・稻・粱・苽・大小豆。〔炙穀
子〕。

と記す。『九穀考』²⁹⁾苽も

段成式西陽雜俎曰黍稷稻粱三豆二麥

と記すが、『西陽雜俎』^{60b)}及び東洋文庫版『西陽雜
俎』^{60a)}には、九穀は未見。

(注 47) 『古今注』⁶³⁾卷之下 草木第六

九穀者、黍、稷、稻、粱、三豆、二麥⁸⁾¹⁹⁾

(注 48) 『農桑輯要』⁶¹⁾卷二

播種
取九穀種黍稷稻麻大麥
小麥大豆小豆

(注 49) 『拾芥抄』(下)⁶⁴⁾

五穀 稻穀 大麥 小麥 大豆 小豆内法之時常
止ニ小豆ニ加ニ
胡麻云云
或 麥 米 粟 大豆近代用ニ此等ノ由ニ光平所レ命ス。
申ニ院也、移徒之時用ニ之ヲ。
或 止ニ大豆 小豆ニ加ニ菉豆 胡麻云云諸家説
不同也、

食べ物の名数

或 粳米甘 麻酸 大豆鹹 小豆苦或麥 黄黍辛
九穀 稗 稻 黍 米 菽・麻 大豆 小豆 大
麥

(注：京都大学電子図書館所蔵本『拾芥抄』^{64b})や尊経閣善本『拾芥抄』^{64c})には 米は梁(梁)と注記がある。また、菽と大豆や小豆が並記され、マメ類が重なるように思える。)

(注 50)『四分律行事鈔資持記』⁶⁵中三上
十七穀者、一稻、二赤稻、三小麦、四穞麦、五小豆、六大豆、七胡豆、八豌豆、九粟、十黍、十一麻、十二薑白、十三閣鼓、十四婆羅陀、十五莠鼓、穉子十六脂那、十七俱陀婆、諸梵言、並未詳何者、(注：調点は『廣文庫』¹⁷)

(注 51)『周易(易経)』²⁾⁶⁶離卦
象曰、離、麗也、日月麗乎天、百穀草木麗乎土。(注：調点は『大漢和辞典』¹⁹百穀) 49
(象に曰く、「離」とは「麗」(附く)の義である。その附くところを見れば、日月(にちげつ)は天(てん)に附いて久しく照らし、百穀草木は土に附いて広く生じている。これらは附くべきところに附いているからである。) 67)

『詩経(毛詩)』²⁾⁶⁸国風 豳 七月
亟其乘屋、其始播百穀。(注：調点は『大漢和辞典』百穀¹⁹)
(亟やかに其れ屋を乗い、其に始めて百穀を播かんとす) 69)

『尚書(書経)』²⁾⁷⁰舜典第二
帝曰、棄、黎民阻饑、汝后稷、播時百穀。(注：調点は『廣文庫』¹⁷)及び『大漢和辞典』百穀¹⁹)
(舜帝は次に「稷に命じて」いう。「棄(稷の名)よ。黎民は阻に饑えている。汝が稷官を后ぎ、百穀を播時せよ(蒔け)。」) 71)

『春秋左氏傳』⁷²襄公十九年
小國之仰大國也、如百穀之仰膏雨焉。(注：調点は『大漢和辞典』百穀¹⁹)

(注 52)『物理論』⁷³一卷に
梁者黍稷之物名 句又見太平御覽穀部 稻者漑種之物名 菽者衆豆之惣名 文類聚穀部 三穀各二十種爲六十疏果之實助 穀各二十凡爲百穀 故詩曰播厥百穀者穀種衆之大名也 初學記 太平御覽穀部
とある。

(注 53)『小學紺珠』⁸卷十 動植類に
百穀
梁、稻、菽各二十種、疏果之實助、穀各二十、

○物理論 黍、稷、稻、粱、麻、麥、苳、菽、雕胡、之屬、國語周樂播種百穀注

汾水濁宜麻 濟水和宜麥 河水調宜菽 洛水輕利宜禾 江水肥宜稻 渭水多力

宜黍(注：調点は『廣文庫』¹⁷)ほか)とある¹⁹)。

『初學記』¹⁰寶器部 五穀第十に
楊泉物理論曰(中略) 梁者黍稷之總名 稻者漑種之總名 菽者衆豆之總名 三穀各二十種爲六十。疏果之實、助穀各二十、凡爲百穀。(注：調点は『大漢和辞典』百穀¹⁹)

とある。
(注 54)『爾雅翼』⁷⁴小學類一 卷一 釋草

菽
菽豆也、其類最多、故九穀之中居其二、又古人說百穀、以爲梁者黍稷之總名、稻者漑種之總名、菽者衆豆之總名、三穀各二十種、爲六十、疏果之實、助穀各二十、凡爲百穀、然予以爲穀之種類、每物不下十數、亦何假疏果後爲百耶(注：調点は『大漢和辞典』百穀¹⁹)

(注 55)『五雜俎』⁴⁶卷之十一 物部三は(注 20)及び(注 46)の記述に続いて次のように記す。

后稷之時、已稱百穀、説者謂、五穀之屬、各有二十、合而爲百、近於穿鑿、百成數也、五穀者、擧其大言之也、(注：調点は『廣文庫』¹⁷)ほか) <后稷のときに、すでに百穀と称した。説を為すものは、五穀の属はそれぞれ二十あり、合わせると百である、というけれども、穿鑿というものに近い。百は成数であり、五穀はその大をあげていっているのである) 46b)。

(注 56)『本朝食鑑』³⁰穀部之二 華和異同 穀部 黍

黍と稷とは、同一類の二種である。粘するものを黍とし、粘せぬものを稷とするのは、やはり稲に梗と糯とがあるようなものである。これらは我が国にもあって、稷は稲黍・黍は糯黍である。赤糜・白芒・黒柜・一稔二米秬(稔はもみながら、秬は一つのもみからの中に実の二つあるくろきび)の数種があり、また丹黍米(たんしよまい)というものもある。これらも各地にあって、餅に作って賞味している。

(注 57)『九穀考』²⁹
稷
説文 稷齋也 五穀之長齋稷也 案重穞稷之

黏者秫重文

案 稷齋大名也 黏者為秫 北方謂之高粱或謂之紅粱 通謂之秫 秫又謂之蜀黍蓋際之類而高大

参考文献

- 1) a. 『重刊宋本禮記注疏附校勘記』, (漢) 鄭元〔注〕; (唐) 孔穎達〔疏〕(『十三經注疏附校勘記〔五卷〕禮記正義』, (清) 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重刊宋本禮記注疏附校勘記; 月令第六; 附釋音禮記注疏卷第十四 (p.278-1), 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻所収
- 2) 『和刻本經書集成 正文之部 第一輯〔五經〕(新注本) 周易・書經・詩經・春秋經・禮記』, 藤原肅(惺窩)〔點〕; 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會, 〔出版〕, 汲古書院〔發行〕, 1976
- 3) a. 『藝文類聚』(全 2 冊), (唐) 歐陽詢〔撰〕; 汪紹楹〔校〕, 中文出版社, 1980 / b. 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻 瀚典全文檢索系統 2.0 版 人文資料庫師生版 1.1 所収 (注: 100 卷。初唐 624 年成立の類書)
- 4) 『太平御覽』(1000 卷目録 15 卷), (宋) 李昉等〔奉勅撰〕; 欽鮑崇城〔刊〕, 1818 年版, 国立国会図書館電子図書館デジタル化資料 古典籍資料(貴重等) 所収 (注: 宋代初期(977 年から 983 年頃)に成立した類書)
- 5) a. 『和刻本諸子大成 第七輯 墨子(墨子全書)・墨子(經訓堂墨子)・論衡』, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1975 / b. 『墨子上』, 山田 琢, 明治書院, 1982, 新釈漢文大系 50 / c. 『墨子』, 藪内 清, 平凡社, 1996, 東洋文庫 599
- 6) a. 『重刊宋本穀梁注疏附校勘記 / 監本附音春秋穀梁注疏』, 〔晉〕范甯〔集解〕; 〔唐〕楊士助〔疏〕(『十三經注疏〔七〕九 春秋穀梁注疏』, 〔清〕阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重刊宋本穀梁注疏附校勘記; 襄公; 監本附音春秋穀梁注疏襄公卷十六; 二十四年 (p.158-2), 甯〔集解〕; 楊士助〔疏〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻所収 (注: 『穀梁伝』は詳しくは『春秋穀梁伝』という。十二卷。中国の『春秋』に対する注釈書で、『公羊伝』『左氏伝』と並ぶ春秋三伝の一つ。孔子の門人魯の子夏の弟子穀梁赤こくりやうせきの撰と伝えられるが、書物として成立したのは漢の初期である。正確には經書ではないが、經書に準じた扱いをされる書物。十三經の一つである。)
- 7) a. 『古今合璧事類備要』, (南宋) 謝維新〔撰〕; 別集・外集 (南宋) 虞載〔撰〕, 国立国会図書館電子図書館デジタル化資料 古典籍資料(貴重書等) 所収 / b. 『古今合璧事類備要』(欽定四庫全書本 子部十一類書類), 諸子百家 中國哲學書電子化計劃 線上圖書館 所収 (注: 『格物総論』は『古今合璧事類備要』別集 94 卷中の各項目の初めに置かれた論。南宋代 13 世紀末頃)
- 8) a. 『小学紺珠』(10 卷), (宋) 王應麟〔編〕; 村瀬誨輔〔點〕(『和刻本類書集成 第二輯』, 長澤規矩也〔編〕, 汲古書院, 1976 所収) / b. 『小學紺珠』(卷第 1-10), (南宋) 王應麟〔輯〕; 村瀬誨輔〔校正〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 9) 『韓詩外傳』(卷第 1-10), (前漢) 韓嬰〔著〕; 鳥宗成〔訓点〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 10) a. 『初學記』, (唐) 徐堅等〔撰〕, 出版地不明, 出版者不明, 1961 同志社女子大学図書館所蔵 / b. 『初學記』(第 2 版), (唐) 徐堅等〔著〕, (北京) 中華書局, 2004 / c. 『初學記』, 讀書網 DuShu.com (<http://big5.dushu.com/showbook/101017>) 所収 / d. 『初學記』(欽定四庫全書・子部・十一類書類), 諸子百家 中國哲學書電子化計劃 線上圖書館所収 (注: 『初學記』は唐 728 年成立。『芸文類聚』と双璧をなす唐代の類書。)
- 11) 『羣書拾唾』(全 12 卷), (明) 張九韶〔編〕; 王道昆〔増〕; 吳昭明〔校〕(『和刻本類書集成 第四輯』, 長沢規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1977 所収)
- 12) 『名数語彙』本体・解説, 古辭書叢刊刊行会〔編〕, 古辭書叢刊刊行会, 1973 (注: 室町末期写本。静嘉堂文庫蔵本の複製)
- 13) 『和漢名数』(上・下 2 卷), 貝原篤信〔編輯〕, 佐野与兵衛〔出版〕, 元禄 5 年版, 国立国会図書館デジタル化資料 古典籍資料(貴重書等) 所収
- 14) a. 『書言字考節用集研究並びに索引』(影印篇・索引篇全 2 冊), 中田祝夫・小林祥次郎〔著〕, 風間書房, 1973 (注: 原本は享保二年版の国立国会図書館岡田文庫蔵。題簽の書名は 増補合類大節用集) / b.

食べ物の名数

- 『節用集大系 第81・82巻；和漢音釈書言字考節用集』，大空社，1995（注：外題は「増補『合類節用集』。柱「書言字考」。）
- 15) a. 『大和本草』，貝原篤信〔原著〕；白井光太郎〔考註〕（第一冊）；岸田松若・田中茂穂・矢野宗幹〔考註〕（第二冊），有明書房，1975／b. 『大和本草』，中村学園大学・中村学園短期大学部図書館電子図書館 貝原益軒アーカイブ所収
- 16) 『經典穀名考』，山田文靜〔著〕，文政11年版，国立国会図書館デジタル化資料 古典籍資料（貴重等）所収
- 17) 『廣文庫 第七冊』（全20冊）（覆刻版），物見高見・物見高量〔著〕，名著普及會，1976（初版：1916年刊）
- 18) 『羣書索引』（全3冊）（覆刻版），物見高見・物見高量〔著〕；今井育雄〔覆刻版編輯責任者〕，名著普及會，1977（初版：1916年刊）
- 19) 『大漢和辞典』（修訂版），諸橋轍次〔著〕；鎌田正・米山寅太郎〔修訂〕，大修館書店，1984
- 20) 『図説 草木名彙辞典』，木村陽二郎〔監修〕，柏書房，1991
- 21) 『茶道名数事典』，小田栄一・森谷尅久〔監修〕，淡交社，1985
- 22) 『日本名数辞典』，朝倉治彦・井門 寛・森 睦彦〔編〕，東京堂出版，1974
- 23) 『名数数詞辞典』，森 睦彦〔編〕，東京堂出版，1980
- 24) 『数のつく日本語辞典』，森 睦彦，東京堂出版，1999
- 25) 『名数絵解き事典』，南 清彦〔著〕；藤原重夫〔画〕 叢文社，2000
- 26) 『和爾雅』（全8巻），貝原好古〔編輯〕，1694年，早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 27) 「食べ物の名数（1）五穀（上）：中国古典に見られる五穀」，森田潤司，同志社女子大学生活科学，45, 90-99, 2012
- 28) 「食べ物の名数（2）五穀（下）：日本古典に見られる五穀」，森田潤司，同志社女子大学生活科学，45, 100-110, 2012
- 29) 『九穀考』，（清）程瑤田〔著〕（a. 『皇清經解』142，（清）阮元〔輯〕；（清）崇光〔続刻補刊〕，（広東）学海堂，1861所収／b. （清）阮元；（清）咸豐補刊，『皇清經解』127：卷五百四十八至卷五百五十一，中國哲學書電子化計劃 線上圖書館所収）
- 30) a. 『本朝食鑑1』（全5巻），人見必大〔著〕；島田勇雄〔訳注〕，平凡社，1976，東洋文庫296／b. 『本朝食鑑』（上・下），平野必大〔著〕；正宗敦夫〔編纂校訂〕，現代思潮社，1979，覆刻日本古典全集
- 31) a. 『和漢三才図会18』（全18巻），寺島良安〔著〕；島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳〔訳注〕，平凡社，1991，東洋文庫532／b. 『和漢三才圖會』（上・下），寺島良安〔編〕；和漢三才圖會刊行委員会〔編集〕，東京美術，1970
- 32) a. 『重栞宋本周禮注疏附校勘記』，（漢）鄭元〔注〕；（唐）賈公彥〔疏〕（『十三經注疏附校勘記〔三〕四 周禮注疏』，〔清〕阮元〔校勘〕，中文出版社，1989所収）／b. 經；十三經；重刊宋本十三經注疏附校勘記；重栞宋本周禮注疏附校勘記，台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻所収／c. 『周禮（永懷堂本）』（43巻），（漢）鄭玄〔注〕；（明）金蟠・葛肅〔校〕（『和刻本經書集成第六輯：古注之部 第二輯 周禮（永懷堂本）』，長澤規矩也〔編〕，古典研究會，1976所収）
- 33) 『重栞宋本毛詩注疏附校勘記』，〔漢〕毛公傳；〔唐〕鄭玄元〔箋〕；孔穎達〔疏〕（『十三經注疏〔二〕三 毛詩正義』，〔清〕阮元〔校勘〕，中文出版社，1989所収）（注：『詩經』は、中国最古の詩篇で、五経あるいは十三経の一。単に『詩』とも呼ぶ。3,000篇あったものを孔子が311編305歌に編纂したといわれる。現行本『詩經』のテキストは漢代の毛亨・毛萇により伝えられたものであるため、『毛詩』と呼ぶことも多い。）
- 34) a. 經；十三經；重刊宋本十三經注疏附校勘記；重栞宋本毛詩注疏附校勘記；大雅；生民之什；詁訓傳第二十四；附釋音毛詩注卷第十七；十七之一；五四；生民（p.594-2）；毛詩大雅，鄭氏〔箋〕；孔穎達〔疏〕，台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収／b. 『毛詩註疏』（卷第1-20），毛〔亨〕〔伝〕；鄭氏〔箋〕；孔穎達〔疏〕，早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 35) 『詩經 下』，石川忠久，明治書店，2000，新釈漢文体系112
- 36) a. 『合類節用集研究並びに索引』，中田祝夫・小林祥次郎〔著〕，勉誠社，1979，古辞書大系（国立国会図書館亀田文庫蔵 延宝8年本〔1680年〕の複製）／b. 『節用集大系 第13・14巻：合類節用集』，大空社，1993（注：影印篇は延宝8年本の複

- 製)
- 37) a. 『重栞宋本左傳注疏附校勘記』, (晋) 杜預 [注]; (唐) 孔穎達 [疏] (『十三經注疏 [六] 七春秋左傳正義』, [清] 阮元 [校勘], 中文出版社, 1989, 所取) / b. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重栞宋本左傳注疏附校勘記; 僖公; 附釋音春秋左傳注疏卷第十二; 三年 (p.200-2), 杜氏 [注]; 孔穎達 [疏], 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所取 / c. 『春秋左氏傳校本』, 杜預 [集解]; 陸德明 [音義]; 秦鼎 [校本], 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所取
- 38) a. 『訓讀說文解字注』, (漢) 許慎 [撰]; (清) 段玉裁 [注]; 尾崎雄二郎 [編], 東海大学出版会, 1981-1991 / b. 『說文解字注』, 段玉裁 [注], (台北) 芸文印書館, 1979
- 39) 『字通』, 白川 静, 平凡社, 1996
- 40) a. 『漢書』, 班固 [撰]; 桃林軒玄朴 [點] (『和刻本正史 漢書 (影印本) (一) 帝紀・表・志・列傳 (上)』, 長澤規矩也 [解題], 古典研究會 [出版], 汲古書院, 1972 所取) / b. 史; 正史; 漢書; 志; 凡十卷; 卷二十五下; 郊祀志第五下 (p.1270), (漢) 班固 [撰]; (唐) 顏師古 [注]; 楊家駱 [主編], 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻資料庫所取 / c. 『漢書補注』 (卷首, 1-100), 班固 [撰]; 顏師古 [注]; 王先謙 [補注], 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所取
- 41) a. 『呂氏春秋』, 呂不韋 [著]; 高誘 [注] (『和刻本諸子大成 第八輯』, 長澤規矩也 [編], 古典研究會 [出版], 汲古書院 [發行], 1976 所取) / b. 『呂氏春秋 下』, 呂不韋 [著]; 楠山春樹 [訳著], 明治書院, 1996-1998, 新編漢文選 3 / c. 『呂氏春秋』, 高誘 [注]; 畢沅 [校正], 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所取 (注: 秦の呂不韋が食客を集めて共同編纂させた書物⁶²⁾。呂覽ともいう。秦の始皇 8 年 (紀元前 239 年) に完成した。)
- 42) 『中国食物史の研究』, 篠田 統, 八坂書房, 1978
- 43) a. 『支那ニ於ケル義倉及社倉 - 四民生活・耕地制度・穀物ノ名稱ノ研究: 米穀資料第 19』, 松本洪 [著]; 農林省米穀部 [編], 日本米穀協会, 1940 / b. 『支那ニ於ケル義倉及社倉 - 四民生活・耕地制度・穀物ノ名稱ノ研究: 米穀資料第 19』, 農林省米穀部 [編纂], 大日本農會, 1933
- 44) 『鶴林玉露』, (南宋) 羅大經 [著] (『和刻本漢籍隨筆集 第八集』, 長澤規矩也 [解題], 古典研究會 [出版], 汲古書院, 1972 所取)
- 45) a. 『新編古今事文類聚 [二] 後集』, 中文出版社, 1982 / b. 新編古今事文類聚. 前, 後, 統, 別, 新, 外, 遺集, (宋) 祝穆 [編], 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所取 / c. 『古今事文類聚後集』 卷二十二~卷二十三 (欽定四庫全書・子部十一・類書類), 中國哲學書電子化計劃線上圖書館所取 (注: 『事文類聚』は中国の類書。170 卷。宋の祝穆編。1246 年成立。「芸文類聚」の体裁に倣い、古典の事物・詩文などを分類したもの。のちに元の富大用が新集 36 巻及び外集 15 巻を、祝淵が遺集 15 巻を追加し、総計 236 巻。)
- 46) a. 『五雜俎』, 謝肇淛 [著] (『和刻本漢籍隨筆集 第一集』, 長澤規矩也 [解題], 古典研究會 [發行], 汲古書院, 1972 所取) / b. 『五雜俎 6』, 謝肇淛 [著], 岩城秀夫 [訳], 平凡社, 1998, 東洋文庫 633 (注: 『五雜俎』16 巻は明末の隨筆。1619 年成立)
- 47) a. 『(新刊) 古今類書纂要』 (12 巻), (明) 璩崑玉 [纂]; 葉文懋 [校] (『和刻本類書集成 第五輯』, 長澤規矩也 [編], 古典研究會 [發行], 汲古書院, 1976, 所取) / b. 『新刊古今類書纂要』 卷 1-11. [1], (明) 璩崑玉 [纂]; 葉文懋 [校], 江戸刊, 国立国会図書館電子図書館デジタル化資料 古典籍資料 (貴重書等) 所取
- 48) a. 『惠空編 節用集大全研究並びに索引』 (影印篇・索引篇 全 2 冊), 中田祝夫 [著]; 木村秀次・小木曾悦雄 [索引作成], 勉誠社, 1975, 古辞書大系 (注: 惠空 (~1691 年); 節用集大全原本は延宝八年 (1680 年) 刊) / b. 『節用集大系 第 15・16 巻: 新刊節用集大全』, 大空社, 1993
- 49) 『日本国語大辞典』 (第二版), 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 [編], 小学館, 2000-2002
- 50) 『字統』, 白川 静, 平凡社, 1984
- 51) 「季節を祝う食べ物 (1) 新年を祝う七種粥と小豆粥」, 森田潤司, 同志社女子大学生生活科学, 44, 79-83, 2010
- 52) 『日本古代穀物史の研究』, 鏑方貞亮, 吉川弘文館, 1977
- 53) a. 『本草綱目』 (全書 6 冊), 李時珍 [撰], (香港) 商務印書館, 1974 / b. 『本草綱目 53 巻・瀕

- 湖脈學 1 卷・奇經八脈攷 1 卷], 李時珍 [撰]; (明) 李建中 [図], 国立国会図書館デジタル化資料 古典籍資料 (貴重等) 所収/c. 『新註校定國譯本草綱目』, 李時珍 [著]; 鈴木真海 [訳]; 白井光太郎 [校注]; 木村康一ほか [新註校定], 春陽堂書店, 1979 (創業百年記念版, 初版: 昭和 4-9 年刊)/d. 維基文庫自由的図書館: <http://zh.wikisource.org/wiki/Wikisource> 所収
- 54) a. 『晉書』, (唐) 太宗 [撰]; 高啓 [輯]; 志村楨 [幹], 荻生茂卿 [句讀] (『和刻本正史 晉書 (影印本) (一) 帝紀・志・列傳 (上)』), 長澤規矩也 [編], 古典研究会 [出版], 汲古書院, 1971 所収/b. 史; 正史; 晉書; 志; 凡二十卷; 卷十一; 志第一; 天文上; 中宮 (p.298), 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻資料庫所収
- 55) a. 『开元占経: 中华易学集成: 天文星象大全』 (上・下), (唐) 瞿曇悉达 [撰]; 常秉义 [点校], (北京) 中央编译出版社, 2006/b. 『唐開元占経』 (欽定四庫全書本子部七 術數類), (唐) 瞿曇悉達 [撰], 諸子百家中國哲學書電子化計劃 線上圖書館所収
- 56) a. 『宋史』, (元) 脱脱ほか [撰], (北京) 中華書局, 1977/b. 史; 正史; 宋史; 志 凡一百六十二卷; 卷四十九; 志第二; 天文二; 紫微垣 (p.973), 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収
- 57) 『続和漢名数』 (上・中・下), 貝原益軒 [撰], 元禄 8 年版, 国立国会図書館電子図書館デジタル化資料 古典籍資料 (貴重書等) 所収
- 58) a. 『校訂譯註 齊民要術』 (上・下), (後魏) 賈思勰 [撰]; 熊代幸雄・西山武一 [譯], 農林省農業総合研究所, 1957-1959/b. 『齊民要術』 (10 卷雜説 1 卷), (後魏) 賈思勰 [撰]; (宋) 孫某 [注]; (明) 胡震亨 [校]; 山田好之 [蘿谷] [點] (『和刻本諸子大成 第六輯 齊民要術・黄帝宅經・大易通變・五行大義ほか』), 長澤規矩也 [編], 古典研究会 [出版], 汲古書院 [發行], 1976 所収/c. 『齊民要術』 (卷第 1-10), 賈思勰 [撰]; 山田蘿谷 [訳], 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収/d. 『齊民要術校釋』, 中央研究院漢籍電子文獻, 人文資料庫師生版 1.1 選自【古籍十八種】
卷一 種穀第三附出-45-, 所収/(注: 『齊民要術』は 92 編、全 10 卷。北魏 532 年から 549 年頃成
- 立)
- 59) a. 『事林廣記』, (宋) 陳元 [編] (『和刻本類書集成 第一輯』, 長澤規矩也 [編], 汲古書院, 1976 所収 (注: 宋元代 1266 年頃・元代 1325 年増補))/b. 維基文庫自由的図書館: <http://zh.wikisource.org/wiki/Wikisource> 所収
- 60) a. 『酉陽雜俎』 (全 5 冊), 段成式 [撰]; 今村与志雄 [訳注], 平凡社, 1980-1981 東洋文庫 382, 389, 397, 401, 404/b. 『和刻本漢籍隨筆集 (6) 唐國史補・酉陽雜俎・兼明書・開元天寶遺事』, 古典研究会・汲古書院, 1973
- 61) 『農桑輯要』, (元) 司農司 [撰], 国立国会図書館デジタル化資料 古典籍資料 (貴重等) 所収 (注: 元の繆啓愉 (司農司) が著した官撰の農書。1273 年成立。内容の大部分は『齊民要術』, 『士農必用』, 『務本新書』, 『四時纂要』, 『韓氏直説』などからの引用。)
- 62) 『中国食物史の研究』, 篠田 統, 八坂書房, 1978
- 63) a. 『古今注』, (晉) 崔豹 [撰], (明) 唐琳 [校], 山縣子祺 [點] (『和刻本漢籍隨筆集 第十集』, 長澤規矩也 [解題], 古典研究会 [出版], 汲古書院, 1972, 所収)/b. 『古今注』, (晉) 崔豹 [撰]; (明) 唐琳 [校]; 山縣子祺 [點], 江戸寛延 2 年 [1749 年] 刊, 国立国会図書館電子図書館デジタル化資料 古典籍資料 (貴重書等) 所収/c. 『古今注』 (四分叢刊三編 中 第 224 冊), 諸子百家中國哲學書電子化計劃 線上圖書館所収
- 64) a. 『拾芥抄』, 洞院公賢 [撰]; 洞院実熙 [補修] (『新訂増補 故実叢書 禁秘抄考註・拾芥抄』, 故実叢書編集部 [編], 明治図書出版・吉川弘文館, 1952, 所収)/b. 『拾芥抄』, 清原業賢・清原国賢 [筆], 京都大学電子図書館所収/c. 『拾芥抄上中下』, 洞院公賢 [撰], 前田育徳会尊経閣文庫 [編], 八木書店, 1998/d. 『拾芥抄』 (中・下), 洞院公賢 [編]; 洞院実熙 [補], 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 (注: 鎌倉時代中期には原型が成立し, 暦応年間 1350 年頃に洞院公賢がそれを増補・校訂したと考えられている)
- 65) 『四分律行事鈔資持記』, (宋) 釋元照 [撰], (a. 『大正新脩大藏經』 律疏部・論疏部, 大藏經學術用語研究会 [編], 大正新脩大藏經刊行會, 1960-1990 再刊發行 所収/b. 『大正新脩大藏經』, 国立国会図書館デジタル化資料所収/c. 東京大学大学院人文社会系研究科大藏經テキストデータベース研究会, 『大正新脩大藏經テキストデータ

- ベース』所収)
- 66) a. 『重栞宋本周易注疏附校勘記』, (魏) 王弼・韓康伯〔注〕; (唐) 孔穎達〔疏〕(『十三經注疏〔一〕三 周易正義』, [清] 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重栞宋本周易注疏附校勘記; 周易兼義上經隨傳; 卷第三; 離 (p.73-2), (漢) 毛亨〔傳〕; 鄭元〔箋〕; (唐) 孔穎達〔疏〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電籍文獻所収
- 67) 『易經 上』, 今井宇三郎, 明治書院, 1987, 新釈漢文体系 23
- 68) a. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重栞宋本毛詩注疏附校勘記; 國風; 豳七月詁訓傳第十五; 附釋音毛詩注疏卷第八; 八之一; 廿六; 七月 (p.285-2), 鄭氏〔箋〕; 孔穎達〔疏〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収 / b. 『毛詩註疏』(卷第 1-20), 毛〔亨〕〔伝〕; 鄭氏〔箋〕; 孔穎達〔疏〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 69) 『詩經 中』, 石川忠久, 明治書院, 1998, 新釈漢文体系 111
- 70) a. 『重栞宋本尚書注疏附校勘記』, (漢) 孔安国〔傳〕; (唐) 孔穎達〔疏〕(『十三經注疏〔一〕二 尚書正義』, [清] 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重栞宋本尚書注疏附校勘記; 虞書; 附釋音尚書注疏卷第三; 舜典第二 (p.44-2), 虞書; 孔氏〔傳〕; 孔穎達〔疏〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収
- 71) 『書經 上』, 加藤常賢, 明治書院, 1983, 新釈漢文体系 25
- 72) a. 『重栞宋本左傳注疏附校勘記』, (晉) 杜預〔注〕; (唐) 孔穎達〔疏〕(『十三經注疏〔六〕七 春秋左傳正義』, [清] 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重栞宋本左傳注疏附校勘記; 襄公; 附釋音春秋左傳注疏卷第三十四; 十九年 (p.585-1), 杜氏〔注〕; 孔穎達〔疏〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収
- 73) 『物理論』, (晉) 楊泉〔撰〕; (清) 孫星衍〔校集〕(早稲田大学図書館古典籍総合データベース『竹書紀年 卷上下・物理論・譙周古史考, 合冊本』に所収) (注: 『物理論』は『楊子物理論』ともいい, 楊泉(字徳淵)撰。西晋代〔265年-316年〕成立。16 卷。散帙。宋代の『太平御覽』などに引かれる。) / b. 『爾雅翼』(全 32 卷), (南宋) 羅願〔撰〕景印文淵閣四庫全書 第 222 冊 經部 216 小學, 臺灣商務印書館, 1983 / b. 『爾雅翼』(欽定四庫全書・經部十・小學類), 諸子百家 中國哲學書電子化計劃線上圖書館所収 (注: 『爾雅翼』32 卷は, 南宋の羅願撰, 南宋 1174 年頃成立。元の洪焱祖音釋。内容は, 爾雅の内から, 釋草, 釋木, 釋鳥, 釋獸, 釋蟲, 釋魚など 6 篇を注釈した專書。)
- 74) a. 『小野蘭山 本草綱目啓蒙-本文・研究・索引-』, 杉本つとむ〔編〕, 早稲田大学出版部, 1974 / b. 『重訂本草綱目啓蒙』(1-4), 小野蘭山〔著〕; 正宗敦夫〔編纂校訂〕, 現代思潮社, 1978, 覆刻日本古典全集 / c. 『本草綱目啓蒙』(1-4), 小野蘭山〔著〕, 平凡社, 1991, 東洋文庫: 531, 536, 540, 552
- 75) a. 『倭名類聚鈔: 掖斎書入』(1 卷・2 卷), 源順〔著〕; 辻村敏樹〔編〕, 早稲田大学出版部, 1987 / b. 『倭名類聚鈔』, 源順〔著〕; 正宗敦夫〔編纂校訂〕, 現代思潮社, 1978 (注: 底本は二十卷本的那波道圓〔校注〕「元和古活字本」) / c. 『諸本集成 倭名類聚抄 本文篇, 索引篇, 外篇』(増訂再版), 源順〔撰〕, 京都大學文學部國語學國文學研究室〔編〕, 臨川書店, 1971 (注: [本文編] は箋注倭名類聚抄, 真福寺本(稲葉通邦摹刻本), 元和古活字那波道圓本(二十卷本), 高山寺本(史料編纂所古簡集影)を所収) / e. 『倭名類聚抄 天文本』, 源順〔撰〕; 東京大学国語研究室〔編〕, 汲古書院, 1987, 東京大学国語研究室 資料叢書 第 12 卷 / d. 『倭名類聚抄 京本, 世俗字類抄 二卷本』, 東京大学国語研究室〔編〕, 汲古書院, 1985, 東京大学国語研究室 資料叢書 第 13 卷
- 76) a. 『箋注倭名類聚抄』, 狩谷掖斎〔著〕; 京都帝國大學文學部國語學國文學研究室〔編〕, 全國書房, 1943 / b. 『箋注倭名類聚抄』, 狩谷掖斎〔著〕(『諸本集成 倭名類聚抄 本文篇, 索引篇, 外篇』(増訂再版), 源順〔撰〕, 京都大學文學部國語學國文學研究室〔編〕, 臨川書店, 1971, [本文編]に所収)
- 77) a. 『雜穀-その科学と利用-』, 小原哲二郎, 樹村房, 1981
- 78) 『集韻』(全 10 卷), (宋) 丁度 等〔奉勅修定〕(a. 『辭書集成』(第 23-24 冊), 谷風主〔編〕, (北京) 團結出版社, 1993 年所収 / b. 早稲田大

食べ物の名数

- 学図書館古典籍総合データベース所収)
- 80) a. 『爾雅注疏』, (西晋) 郭璞〔注〕; (北宋) 邢昺〔疏〕 (『和刻本辭書字典集成 第一卷』, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1980所収) / b. 『十三經注疏〔八〕』, [清] 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989所収) / c. 經; 十三經; 重刊宋本十三經注疏附校勘記; 重刊宋本爾雅注疏附校勘, 台湾中央研究院歷史語言研究所漢籍電子文獻所収)
- 81) 牧野富太郎: 『新訂 牧野新日本植物圖鑑』, 北隆館, 2000
- 82) 『医心方 卷三十 食養篇』, 丹波康頼〔撰〕; 横佐知子〔全訳精解〕, 筑摩書房, 1993
- 83) a. 『通占大象曆星經』 (卷上・下), (漢) 甘公・石申〔著〕; (明) 程榮〔校〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 / b. 『漢魏叢書 第33冊 (王子年拾遺記・通占大象曆星經・飛燕外傳・古今刀劍録)』, 諸子百家 中國哲學書電子化計劃 線上圖書館所収
- (2012年11月9日受理)